

---

# メイド口ボ

猫満月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者また  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メイドロボ

### 【Zコード】

Z7091E

### 【作者名】

猫満月

### 【あらすじ】

主人公、青空雲ハが出会ったのは、“人間恐怖症”的女性型ロボ  
ット。最初は雲ハのことも敵視していたロボットだったが、優しい  
雲ハに、少しずつ心を開くようになり  
……。

## プロローグ

苦しい。

……助けて、誰か助けて。

もうひるんな苦しきのは嫌。

耐えられない。

誰か……誰か私を壊して。

お願い……、殺して。

## 第1話 店

「…………」

とある繁華街を歩き続ける事数十分。カラフルな壁に彩られた店にて、男は辿り着いた。何度も地図を見て間違いでない事を確認し、その男は店の中へ足を踏み入れる。

その瞬間…………男を、沢山の人影が取り囲んだ。

「いらっしゃいませ！」

それは何十人ものメイドたちだった。男は一瞬怯んだが、すぐに唇を引き結んで背筋を伸ばす。

「（）来店は初めてですか？」

二次元の世界から飛び出してきたアニメキャラのような甘く可愛らしい声で、目の前のメイドがそう問う。男は何度か首を縦に振り、やつとの思いで返答した。

「…………は、はこ」

「それでは、いらっしゃいのお席へどうぞ」

これまた可愛らしく、パステルカラーの机と椅子を指してにっこりと微笑むメイド。男は、メイドたちに軽く頭を下げてからその席に腰掛けた。

「只今、当店の責任者を呼び出しますので少々お待ちください」

「はい」

「コーヒー や ジュース は おかわり自由 となつて おりまますので、お気  
軽にお申し付けください」

「はい」

メイドたちが自分の前から姿を消してしまつと、男はやつと肩の力を抜いて、大きく息を吐いた。

こんな可愛らしい店に入ったのは彼にとって初めての体験だった。居心地が悪い。こんなところで知り合いの女性に会つたりしたら死にたくなるだろう。

男は溜息を吐きながら、出されたコーヒーを口に運んだ。目線だけを動かして、賑やかな店内を観察する。

はじめは男性客が多いように感じたが、良く見れば女性客も多かつた。小学生くらいの子供も居れば、老人もちらほら。

……男の田の前で、たつた今、一人の中年女性が“買い物”をしていつたようだ。

「カードで、一括払いでお願いします」

甲高い声でメイドにそう告げ、中年女性は足早に店を出て行つた。男はその女性の後姿をぼーっと見つめたまま、心中で呟いた。

（カードで一括払いか。……一度は言つてみたい台詞だな）

それから男は、先程から忙しそうに働いているメイドたちを田で追つた。メガネを掛けたメイド、ポニー テールのメイド、ツインテールのメイド……。メイドの種類は様々だ。全てのメイドが愛らしい笑顔を浮かべて接客をしている。

「いらっしゃいませ！」

「今回の『希望は何に致しますか？』

「修理ですね。了解しました！ お値段の方は後ほど

……

こんなに間近でメイドたちを見ているのに、未だに信じられない。

彼女たちが皆、ロボットだなんて……。

## 第2話 口ボット販売店

この店は、最近巷で噂になつてゐる『口ボット販売店』だ。口ボットを取り揃えられている口ボットのバリエーションは幅広く、家事、育児などを受け持つメイドロボや大工などの力仕事を軽々こなしてしまつ男性型ロボなど、目的に合わせた口ボットを購入する事が出来る。

そしてこの男も、口ボットを購入しようとしたこの店へ訪れた人物のひとりだった。

暫く椅子に座つたまま待つていると、人の良さそうな笑みを浮かべた初老の男性が現れた。

「いらっしゃいませ。この店の責任者の大野と申します」  
「あ、……ええと、青空雲八あおぞらくもはちです。宜しくお願いします」

片手を差し出し軽く握手を交わすと、大野はすぐさま雲八の隣に腰掛けた。

「ご来店は今回が初めてということですね」

「は、はい。そうなんです」

「ご希望などはおありますか？」

「えーと……俺、この街の大学に行く為に上京してきたんですけど、恥ずかしい事に家事が全く出来ないので、身の回りの世話をしてくれれるアンドロイドを購入しようと思つのですが」

「家事のできるアンドロイドは女性型のみしかご用意していないのですが、それでも宜しいですか？」

「はい、構いません」

「かしこまりました。それでしたら、当店のオススメはこの3体になります」

差し出された写真には、3人の女性……もとい、3体のメイドロボが映っていた。1枚目、なかなか人懐っこいような笑みを浮かべたロボ。  
……設定年齢は21歳。2枚目、元気そうに笑っているロボ。  
……設定年齢は16歳。3枚目、少しあんまり感じの笑みを浮かべているロボ。……設定年齢は22歳。

親に買えと譲められただけなので、正直どれでも良かつた。雲ハは何度か頭を搔き、3枚目の写真を手に取った。

「それじゃあ、この……」

言いかけたその時、大野が持っている分厚いファイルから、1枚の写真がひらりと落ちた。

「あ、何か落ちましたよ」

雲ハはそれを拾い上げ大野に手渡そうとしたが、その写真に写っているものを見て、動きを止めた。  
そこに写っていたのは、1体のメイドロボだった。他のロボたちは皆口元に笑みを浮かべているのに、このロボだけは無表情だ。右目が青色、左目が赤色の、神秘的な瞳。しかしその瞳は虚ろで、どこか遠い目をしている。

「あの、これは……？」

大野はその写真を見て、一瞬悲しそうな顔をした。しかし、すぐに優しげな笑みを浮かべて質問の答えを返してくれた。

「これは処分予定の女性型アンドロイドです」

「処分？……不良品なんですか？」

「いえ、そうではないのですが、少々問題がございまして。もし興味がありなのでしたら、見学なさいますか？」

雲ハは暫く写真を見つめた後、首を縦に振った。何故かは分からないが、この口ボに会つてみたいという強い気持ちが湧いたのだ。

「それでは、こちらへどうぞ」

### 第3話 倉庫

連れてこられたのは、店の倉庫らしき所だった。倉庫は湿っぽくて真つ暗で、とてもあの可愛らしい店の中に存在する空間だとは思えないほど、暗く寂しい場所だった。そこには大きなガラスケースが沢山並んでおり、その中に瞳を閉じた状態のロボットたちが1体ずつ入っている。

「原則として、3回以上返品されたロボは処分する決まりとなっているのです。お客様に不快感を与えるだけでなく、新しいロボを製造する時に邪魔となり兼ねません」

大野はそう説明しながら更に地下へと続く階段を下りていく。雲八は周りに並ぶロボたちを気味悪そうに見つめながら、その後へ着いていった。

……地下3階に、そのロボはあった。

大野曰くこの店の処分予定のロボは、引き取り先がなければ返品後4日目の早朝に処分されるそうだ。そして今雲八の目の前にいるロボは、今日で処分予定の日にちが3日過ぎたらしい。つまり、明日の早朝には処分されるということらしい。

彼女の皮膚は恐ろしい程に白く、透き通っていた。その細い首には白い紙が巻きつけられており、そこには『004』という番号が記入されている。どうやら、これはロボットの個体番号のよつなものらしかった。そのロボには、幼い子が良くやるような大きなお団子が2つ、まるで鼠の耳のようについていた。その髪型はとても印象的で、美しく整ったロボットの顔立ちには酷く不釣合いなもののように思えた。しかし、なんだかそのギャップがまた愛らしくも見えて、一度見ただけで心を奪わってしまった。

## 第4話 人間不信

もしもこれが本物の人間だとして、普通に街を歩いていたとしたら……きっと擦れ違った人々は振り返り、あまりの美しさに言葉を失うだろう。それほどまでに彼女が放つ神秘的なオーラは強烈だった。雲ハもまたその美しさに魅了され暫く言葉を失っていたが、すぐに我に返つて大野に尋ねた。

「あの……ところで、どうしてこれ、返品されてしまったんですか？ 美しいから買い手はいくらでもいそうですが。先程も聞きましたが、不良品というわけでは無いんですよね？」

すると大野は小さく頷き、俯いたまま弱々しい声を出した。

「……はい。実は……このロボは、少々人間不信なところがあります」

それを聞いた雲ハは、驚きを隠せず大声をあげた。

「え！ に、人間不信って……ロボットが、ですか？」

「はい」

大野は深く頷いて、ロボの入ったガラスケースにそっと触れた。

「最初はこのロボも他のロボと何ら変わりない、笑顔の可愛い、とても元気のいいロボだつたんですね。しかし、どうやら最初の雇い主様に様々な暴力を受けたらしく……。それから、人間が恐ろしいと泣くようになりました」

「え……」

雲八は、慌てて顔をあげ、目の前の口ボを凝視した。……一体この口ボは、その雇い主とやらに何をされたのだろう。

「大野さん。その話、もう少し聞かせて頂けませんか？」

「はい……構いません。ただ、私にすら何をされていたかまでは詳しく話しませんので、私が知っている事だけで宜しければ、全てお話しします」

雲八は004号の入ったガラスケースに両手をつけて、大野の話に耳を傾けた。

## 第5話 人間恐怖症

「「」のロボ…… 〇〇四号は、店に並んだその日のうちに買ひ手が決まりました。お買い上げになられた雇い主様は、ちょうど青空様と同じくらいの年齢の男性でした」「

…… そう、その日、〇〇四号はその男性と手を繋いで店を後にした。満面の笑みを浮かべて、大野に大きく手を振りながら 。。。。

「それから1週間、2週間、3週間…… 1ヶ月経ちました。雇い主様から返品の連絡も無く、きっと大切にして下さっているのだろうと思っておりました。しかし…… その矢先でした。ゴミ収集の方々から、当店に連絡が入ったのです」

ロボットのようなものがゴミ捨て場に捨てられているのですが、これはそちらのお店のロボットではありませんか？

雲八はハッと思を呑み、大野のほうを見た。

「……もしかして、そのロボが？」  
「……はい。この〇〇四号でした」

大野が「ゴミ捨て場に駆けつけると、〇〇四号は確かにゴミ捨て場に遺棄されていた。が、しかし……。

「〇〇四号は、機能停止しておりました」

哀しげに呟く大野。雲八は、大野の言葉を繰り返した。

「機能……停止？」

「はい。……ロボットことひでの、死で「」がこます」

「死？ ど、どうしてそんな……！」

「ロボはとても丈夫につくつてあります。ちょっとやそっとの」とでは壊れません。しかし、私がゴミ捨て場に駆けつけたとき、……彼女は、無残な状態でした」

辛そうに頭を伏せる大野。雲ハは眉を顰め、少し声を落として尋ねた。

「……どういう意味ですか？ ……無残な状態？」

はい、と呟いた大野の瞳は、若干潤んでいるように見えた。

「……引き取りに行つたとき、〇〇4号には下半身がありませんでした」

「！ 下半身が……？」

「……調べた結果、自然に壊れたのではないらしいという結論に落ち着きました。誰かに鋭利な刃物か何かで切り落とされたのでしょうか？」

「そんな……」

「……当店のロボは、できるだけ人間に近くなるように製造しておりますので、心もありますし、血液も、偽物ではありますが一応通つております。そして勿論、……痛みも、感じるようになります」

それを聞いた雲ハは片手で口元を覆つて顔を歪めた。痛みも感じ、心もある……。それなのに、下半身を切り落とされたりしたら……。

「……下半身は見つかりませんでしたが、脳内に入れてあった記憶などは全て無事でしたので、下半身をもう一度作り直して〇〇4号をこの状態まで復元しました。しかし……記憶をそのまま残してしまったのがいけなかつた。〇〇4号は人間恐怖症になり、お買い上げ頂いてもすぐに返品されるようになつてしまひました」

「どうして、記憶をそのまま残したりしたんですか？　記憶を無くせば、恐ろしい記憶に苛まれる事も無かつたのでは？」

「……〇〇4号は、家事などが完璧に出来るように製造してあります。記憶を消してしまうと、家事の仕方などのデータも全て失われてしまひます故、仕方なかつたのでござります」

雲八は改めてロボットの顔をまじまじと見つめた。この〇〇4号は空白の1ヶ月間、以前の雇い主から、きっと想像もつかないような酷い扱いを受けたのだろう。そう考えたら、〇〇4号があまりにも憐れに思えた。人間のせいでこんなことになつてしまつたのに、折角心を持つて生まれてきたのに、人間を恨んだまま、人間に恐怖心を抱いたまま、明日にはこの世界から消えなければならぬなんて……。

少しだけでもいい。彼女に、この世界に生まれて良かつたと思つて貰いたい。

雲八は決意した。ガラスケースに眠るロボットの横顔を見つめたまま、大野に声を掛ける。

「大野さん」

「……はい？」

「……俺、このロボットを購入します」

「はい。…………えつ？」

大野はきょとんとした顔をしたが、すぐさま慌てた様子で雲八の顔を覗きこんだ。

「ちょ、ちょっと待って下さい。……本気ですか？」

雲八は躊躇い無く頷き、大野に向かつて笑みを浮かべた。

「はい」

「本当に宜しいのですね?」

「はい」

「……わかりました。それでは、004号の起動準備を致しますので少々お待ちください」

大野は、慎重に004号をガラスケースから取り出した。ガラスケースの中には何か特殊な液体が入っていたらしく、004号の衣服や髪の毛は透明な液体で濡れてしまっていた。

「マニユアルなどはこの袋に入れておきます。何か困った事があればお読みください。尚、無料返品可能期間は3週間です。その期間を過ぎた場合返品の際に手数料がかかりますので、予めご了承ください」

「はい。……わかりました」

そう返しながら、雲ハは決意していた。絶対に返品などはしない。もう一度と彼女に悲しい思いはさせない、と。

雲ハは、無責任という言葉が一番嫌いだった。

「それでは青空様。004号の首に捲きついている紙を解いてください。それが起動合図となります。……わあ、どうぞ!」

「……は、はい!」

雲ハは恐る恐る004号の首に手を伸ばした。そして、首に捲きついているその紙をそつと解いた。

紙を解いた瞬間、004号の頬に、赤みが差した。少しづつ、心臓

の鼓動のような音が響き始め、その音が大きくなるに連れて、モーター音のような音も鳴り始めた。雲八は少しうるたえながら〇〇4号の目の前に立った。……雲八の目の前で、〇〇4号の両目が開く。吸い込まれてしまいそうな青色と赤色のオッドアイ。……やはり写真で見たのと同じ、虚ろな目だった。

「おはよー、〇〇4号」

大野が笑みを浮かべてそう言つと、〇〇4号は両目を見開いた。そして、自分の両手を見つめて困惑したような表情を浮かべた。

「…………博士…………なぜ、私はまだ存在しているのですか？」

大野はその質問には答えず、雲八の方に視線を振った。

「…………新しい雇い主様がいらっしゃったんだ。ほら、〇〇4号。…………挨拶しなさい」

〇〇4号は唇を震わせ、首を横に振りながら後ずさった。見る見るうちに、彼女の顔から血の気が引いた。

「あ、あああ…………つ博士…………また、私を裏切ったのですね…………？  
何度も…………私は貴方に伝えたはずです。…………壊してください、と。  
それなのに…………なぜ、まだ私をこんな世界に生かしているのですか  
！　私はもうこんな世界嫌なんです…………！　人間の顔なんて、もう  
見たくない！」

声を荒げて大野に掴みかかる〇〇4号を見て、呆然とする雲八。大野は慌てて〇〇4号の顔を雲八に向けさせた。

「004号！ この方が新しい雇い主様だ。大切にして頂きなさい」

雲八を捉えた004号の瞳が、更に大きく見開かれた。彼女の脳内に、あの悪夢の日々がフラツシユバツクする。

『……この方が君の雇い主様になつてくださるんだよ』

『初めまして、004号。仲良くしような！』

『は、はい！ わ、わたくし……頑張つてお仕事します！』

アンナニ、優シソウナ方ダツタノニ……彼ハワタクシヲ痛メツケタ。……殺シタ。ドウシテデスカ？ ワタクシハ、貴方ノタメ二頑張ツタノニ……。貴方ニ一生ヲ捧ゲル決意ヲシタノニ……。

「い……ついやああああ！」

004号は発狂し、雲八を突き飛ばした。雲八は後ろにあつた棚に頭をぶつけてしまい、うつと呻き声を上げた。大野が慌てて004号を取り押さえようとする。しかし004号は泣き喚きながら暴れまわった。

「こ、こら、004号！ 落ち着きなさい！」

「いやああああ！ 来ないで！ 人間なんて大嫌い！ 早く、早く殺して……！」

雲八は瞬きを繰り返しながら、暴走する004号を見つめていた。こんな風になるまで彼女を痛めつけた以前の雇い主に強い憤りを感じた。

## 第7話 購入

「申し訳ありませんでした、青空様！」

大野が必死に雲ハに頭を下げる謝罪する。雲ハは先程棚にぶつけたところを押さえながら、笑みを浮かべた。

「い、いえ。大丈夫ですよ」

大野は少し言い難そうに、雲ハの顔を見て、こう囁いた。

「……しかし、あれでお分かりでしょう？ 004号は極度の人間不信で、今や開発者である私にすら心を開いてくれません。大変な思いをされる前に、他の口ボにされた方が宜しいのでは……？」

雲ハは一瞬だけ考えたが、激しく首を左右に振った。

「いいえ、俺は004号を買います。大切にしてみせます」

「嗚呼……青空様、貴方はなんて心の優しいお方なんでしょうか。本当にありがとうございます！ あんな口ボですが、私にとつては娘のよろなものです。どうか、どうか……大事にしてやってください！」

「はい、勿論です！」

2人は固く握手を交わして、笑顔を浮かべた。

「それでは……お値段の方ですが、こちらになります」

「あれ？ ……あの、他の口ボより安くないですか？」

「あれは少々難がありますので、お安く致しました。……他のお客

様には、どうか」内密に

「はは、助かります。ありがとうございます」

すぐさま雲ハは持つていた鞄の中から財布を取り出した。両親が口ボ購入の為に貯金をしておいてくれたので、難無く支払いを済ませることができた。

004号は、すぐに他の定員に連れてこられた。しかし、004号の両目には黒い布が捲きつけられ、口には猿轡<sup>マジカラボ</sup>がはめられ、白く細い手足には、まるで監禁されているかのような拘束具が取り付けてあつた。雲ハはそれをみて驚愕し、大野に小さな声でこう訊いた。

「お、大野さん。これは取つたほうがいいんじゃ……」

「ですが、外せばまた大暴れしますよ」

「……で、でも、」

これではあまりに可哀想だ。……それに、色々と誤解されかねない。その証拠に、他の客たちが、雲ハの方をじろじろと見ていた。

004号は、小刻みに震えている。大野がそっと肩に触ると、細い肩がびくりと跳ねた。

「……004号、何故こんな風に君を扱わねばならないか、わかるかい？」

大野が優しくそう尋ねると、004号は少し肩の力を抜き、頷いた。他のメイドロボが、004号の口に嵌められた猿轡を外す。すると、004号は僅かに口元に笑みを浮かべて口を開いた。

「……わ、私を、壊してくださるんでしょう？　ありがとうございます」

「博士。これで私は救われます……」

少なからず死への恐怖はあるようだが、それよりも、004号は人間の住むこの世界から早く消え去りたいようだつた。雲八はそんな004号の姿を見ていられなくなり、004号の瞳を覆い隠していった黒い布を取り去つた。

「一。」

急に明るくなつた視界と、その視界に映り込んでいる雲八の姿を見た004号は、戸惑いを隠せないようだつた。雲八は優しく笑みを浮かべて、004号の自由を奪つている拘束具などを全て外してやつた。

「俺は今日から君の雇い主……、いや、同棲者になる青空雲八だよ。君のことを大切にするつて約束する。……よろしくね」

雲八はそう言いながら右手を差し出した。しかし004号は震えながらその手を見つめるだけで、握り返そつとはしなかつた。

……最初の雇い主もそうだつた。優しそうな笑みを浮かべていたから、安心して握手を交わした。それなのに……彼は、彼女を裏切つたのだ。

「やつぱりまだ、怖いかな

雲八は少し困ったように笑つて、その手を引っ込んだ。004号は俯いて、涙を浮かべたまま立ち竦んでいる。

「俺の家、近くなんだ。一緒に行こ」

雲八は少し強引に、震える004号の手を握った。004号は小さく悲鳴をあげて雲八の手を払い除けようとしたが、しつかり繋がれた両手は、どんなに拒絶しても離れなかつた。

「それじゃあ、大野さん。また何か会つたら来ます」

「はい。ご来店有難う御座いました」

周りにいるメイドロボたちも、雲八たちに頭を下げる。

「ご来店有難う御座いました！」

004号はまだ雲八の手をどうにかして払おうと必死になつていたが、雲八は全くそれを気にせず、夕暮れの街を歩き始めた。

## 第8話 会話

人間が苦手な004号の為に、雲ハはバスや電車を利用するのをやめた。少し時間はかかるが、歩いて自宅のマンションへ向かうことにしたのだ。

「……もしかして、寒い？」

震え続けている004号を心配してそう声をかけてみたが、004号は唇を噛み締めたまま、そっぽを向いてしまった。寂しかつたが、仕方の無い事なので我慢した。……これから少しづつ仲良くなればいい。

30分ほど歩いて、2人は6階建ての小さなマンションに辿り着いた。

「俺の家……つていうか部屋は、4階にあるんだ。さ、行こうか」

そう言いながら、雲ハは004号の手を引いて階段をのぼつていく。004号は不安げに階段の上から地上を見下ろしていた。

「高いところ、苦手？」

そう訊くと、004号はまた俯いてしまった。雲ハは首を傾げながら、更に階段をのぼつていった。

部屋の前に来ると、雲ハは胸ポケットから小さな鍵を取り出した。それを鍵穴に差し込んで回す。……小さく鍵の開く音がした。

「あんまり広い部屋じゃないけど、我慢して」

雲ハはそう言って笑うと、004号を連れて部屋の中へ入った。

「ええと……台所はこりで、風呂場はこりで、トイレはそこのドア。部屋はとつあえず3つあるから……」この部屋を君の部屋にする。それで、こっちの部屋は俺の部屋ね。残りの一つはリビングみたいなものだよ。あと、めちゃくちゃ狭いんだけどベランダがあるんだ。そこから出られるから、後で確認しておいて」

雲ハは004号に、部屋の間取りを簡単に説明した。

004号は初めて来る部屋の中にとっても不安を感じている様子だった。何度もトイレと風呂場を行き来して、何かを確認しているようだ。その真剣な様子を不思議に思い、雲ハは004号に声をかけた。

「…………どうかした？」

雲ハが尋ねると、004号は、初めて雲ハに対しても口を開いた。

「…………あ、あの、ま、窓を確認しようと……」

「窓？」

「は、はい……。窓がちゃんとあるかどうか、確認しようと……思ったのです」

「ああ……換気のため?」

「そ、それも……あり、ますが……」

004号はそう言しながら、ある出来事を思い出していた。

以前の雇い主は、とある高級マンションの9階に一人で暮らしてい

た。

彼は、004号を購入して家に連れ帰ると、すぐに彼女を鎖などで拘束した。そしてその後、トイレの狭い空間に、そのままの状態で半日放置した。

トイレには窓が無く、例え鎖を取つたとしても逃げられないようになっていた。炎天下の中でトイレに閉じ込められた004号は酷い脱水症状に陥り、危うく機能停止になりかけた。

またある時は、窓の無い風呂場に連れて行かれて水を張った浴槽に2日間浸かりつ放しにされた事もあった。水の冷たさで体力は奪われ、そこでも004号は機能停止しそうになった。

挙句の果てには、9階のベランダから地上に向かつて投げ落とされた事もあった。無論、鎖で手足が不自由なままで、である。その時は身体の一部が欠落してしまったが、雇い主は004号を修理に出そうとはしなかった。その為004号は自分自身でその故障を直さねばならなかつた。

そう……004号が窓を探したのは、また同じように虐待されない為だった。もしトイレや風呂場に閉じ込められたとしても、窓があれば、逃げる」とは可能だから。

「それもあるけど……？」

おぞましい日々を脳内で繰り返し思い出していた004号は、心配そうに自分の顔を覗き込む雲ハを見て、きまりが悪そうに下を向いて首を横に振つた。

「話すことには出来ません。博士に禁じられていますので」

「禁じられてる？ どうして？」

「……話せば、折角契約していくださつた雇い主様が、暗く重い過去

を背負つていいる私を負担に思つて捨ててしまつ可能性が無いとも限らないからです」

「そんな事、俺は絶対にしないよ。それでもダメなの？」

「……申し訳御座いません」

雲ハは少々残念そうな顔をしたが、すぐに笑顔を浮かべた。それから004号の頭を優しく撫でてやつた。

「それじゃ、いつか話せるときが来たら話して。俺は絶対に君を捨てたりしないから。……約束する。ずっと大切にしてみせるから。  
……いつまでも」

004号が自分に対して口を利いてくれた事が嬉しかったので、まるでプロポーズのような照れ臭い言葉を、雲ハは発した。004号は、暫く不思議そうな顔をして雲ハの顔を見つめていた。

## 第9話 名前

「あの、……私は最初に何をすれば宜しいでしょうか」

おずおずと尋ねてくる004号。まだ、雲ハに対して少しだけ恐怖心を抱いているらしい。よほど恐ろしい目に遭つたのだろう。雲ハはそんな004号を見て心を痛めた。

「今日は折角うちに来たんだし、ゆっくりすれば良いよ。また慣れてきてから少しずつ仕事を頼むようにするから」

004号は大きな瞳を見開いて雲ハを見つめた。自分を気遣う優しい雰囲気に戸惑つてしまつたのかもしれない。雲ハは、004号のその大きな瞳に戸惑っていた。ロボットだと知っていても、とてもロボットには見えない。日本の技術がここまで発達したことが、未だに信じられなかった。

こんなに間近で見つめているのに、004号の瞳は人工的に造られたものとは思えない。……それに、確かに004号は呼吸をしているのだ。人によって造られた人工的な肺とはいえ、彼女の肺はまるで人間そのもののように機能している。

「……004号」

ふとその名前を口にしてみたら、004号は首を傾げて雲ハを見た。

「はい。何でしょうか」

「……004号、かあ。なんか、いかにもロボットを感じの名前だよ

な

「……はい。しかし、私は確かにロボットですので

「でも、一緒に暮らすのに〇〇四号っていうのも、ちょっとな……」

雲八は暫く頭を抱えてなにやらぶつぶつと呴いていたが、突如何かを思いついたように、満面の笑みを浮かべた。

「〇〇四号。君の名前って勝手に改名しても良いの？」

「……恐らく、問題は無いと思われます。私は〇〇主人様に購入された時点で〇〇主人様の物ですの」

「そつか。じゃあ……君に名前をつけたあげるよ」

「名前、ですか？」

「名前がないと、色々不便だからね。うん……どんな名前がいいかな？」

雲八は、まるで自分の赤ん坊に名前を付ける時のように緊張しながら、〇〇四号の名を考え始めた。

……暫くして、雲八は〇〇四号の目を見つめ、いつ言った。

「〇〇四号。……カエデなんてどう？」

「カエデ、ですか？」

「うん。もし将来娘ができたら、カエデって名前をつけたいって思つてたんだ。俺、カエデが大好きだから」

「……カエデとは、どんなものですか？」

「秋になると凄く綺麗に赤く色づく葉っぱだよ」

「そうなのですか。……わかりました。カエデに改名いたします」

〇〇四号はそう言つてそつと瞼を下ろした。その後、彼女のものではない機械的な女性の声が、彼女の体のどこから聞こえてきた。

『新データ、受信完了。データにインプット致します。……完了ま

で残り5秒。4、3、2、1……、完了致しました』

……カエデの瞳が、静かに開いた。カエデは大きく息を吐いてから、雲八を見上げた。

「……完了致しました。これから私のことはカエデとお呼び下さい」「あ……う、うん」

突然カエデの体から聞こえた女性の声。それを聞いてようやく、カエデがロボットだという事を思い出した。それほどまでに、彼女は完成度の高いロボットだった。

## 第10話 恐れ

「もし、」

雲ハが立ち上ると、カエテはびくつと体を震わせた。怯えたよつな目をして、雲ハを見上げている。

「……あ、『めん』めん。ええと、そろそろ夕飯の用意をしようかなと思つても」

慌てて云うと、カエテはそつと立ち上がり、台所に向かつて歩き出した。

「あ、……カエテ？」

「……私の仕事です。雇つて頂く以上、私の仕事は私がします」

「え？ ……それじゃあ、頼むよ」

雲ハはそつと再びその場に腰を下ろした。

「食べたいものは御座いますか？」

「うん、任せよ」

「承知しました」

カエテはそのまま、のれんの奥へ消えていった。

それから数分経つて、冷蔵庫を開ける音や「」を扱う音が聞こえてきた。懐かしい香りが漂つてくる。……どうやら、カレーか何かのようだ。

そういうえば、今冷蔵庫にはカレーの材料くらいしか入つていなかつ

たな、と雲ハが思つと同時に、皿の割れるよつた音と、カエデの悲鳴が聞こえた。

「……カエデ！」

慌てて台所へ向かうと、カエデは床に座り込んで震えていた。その傍らに落ちているのは……包丁、らしい。カエデは蒼ざめて、その包丁を見つめている。

「カエデ、大丈夫？」

雲ハはカエデの傍へ駆け寄つた。そして、カエデの指に血が滲んでいるのを見つけた。

「血が出てるじゃないか。……切つたの？」

「あ……あ……」

カエデは震えるだけで、何も言わない。その瞳に涙が浮かび上がるのを見た雲ハは、咄嗟にカエデに向かつて大声を出した。

「カエデ！ こっちにおりで。手当してあげるから  
「いつ……いや…」

カエデは首を大きく横に振り、泣き叫んだ。そして両手で頭を押されて蹲り、首を更に激しく振った。

「いや……！」

「カエデ、」

雲ハはそつとカエデの手をとった。硝子玉を扱っているかのようだ、

慎重に。

「……カエデ、ごめん。大声出したりして……。後は俺がやるから、部屋で休んでていいよ」

優しくそう言ってカエデを立たせると、カエデは両手を両手で覆い隠したまま、ふらふらと台所から出て行つた。雲八は床に転がつたままの包丁を拾い上げて、小さく溜息を吐いた。

「あー……、床に傷が……」

台所にはカレーの匂いが充満している。カレーはもう出来上がりついようだ。恐らく包丁を洗おうと流しに持つていいくときに、誤つて落としてしまったのだろう。

## 第11話 追憶

カエデは、部屋に辿り着くと、膝を抱えて壁のそばに蹲つた。

……カレーの匂いがする。外から聞こえる虫の声が、夜を運んでくる。暗い部屋。……あの日と、何もかも同じだった。

あの日……料理を作れと以前の雇い主に命令されて、慌てて料理に取り掛かつた。その時、冷蔵庫の中にはカレーの材料くらいしか入っていなかつた。仕方なく、カエデはカレーを作り始めた。野菜を切り刻んで、水の分量を量つて、……何も問題は無い筈だつた。

しかしあの男は、そのカレーを一口食べた途端、激昂した。なんだこのカレーはと喚き散らし、カエデの首を締め上げた。それだけでは足らなかつたのか、カエデを台所へと連れて行つた男は、流し場に放置していた包丁を構え、カエデの手をまな板に押さえつけたのだ。

「お、おやめくださいご主人様！ 離してください！」

「いいじゃねえか。どうせ機械なんだろ？」

「た、確かに私はロボットです。ですが、い、痛みは感じるのです！」

「うるせえな。……黙れよ」

その瞬間、身を切り裂くような激痛が走つた。左手の人差し指に火がついたような感覚と共に、自分の指が切り落とされた事を知つた。叫び声を上げてのた打ち回るカエデ。男はカエデの指先から溢れ出る血を見つめて、乾いた笑い声を上げた。

「なんだ、結構人間らしく作つてあるんだな。血まで出でてくるよう

になつてんのか」

男は悪びれた様子も見せず、台所から去つて行つた。

カエデは急いで切り落とされた自分の指を拾い、自身のメイド服のエプロンで擦つた。表面は防水加工がしてあるので水に触れても平気だが、内部もそうであるという自信は無かつた。

痛みに顔を歪めながら溢れる涙を拭い、切れてしまつた回線を修復する作業に取り掛かつてみた。しかし、流石に元のように繋ぎ直すことはできず、包帯を巻きつけて生活することになった。人間と違つて細胞が無い為、放つておいても自然には直らないのだ。治まることのない痛みを抱えて、カエデは泣きながら眠りについた。

「カエデ、もう平氣?」

突然頭上から誰かの声がして、カエデはハッと顔を上げた。カエデの顔を心配そうに覗き込んでいたのは、雲八だつた。

「電氣くらい点ければいいのに」

雲八はそう言つて電氣のスイッチを入れた。部屋が明るくなる。突然の眩しさに、カエデは目を細めた。恐ろしい記憶を思い出しながら、ずっと自分は膝を抱えて放心していたらしい。

「カレー、できたよ。……つつても、カエデが作ってくれたから、盛り付けただけだけど」

雲八はそう言つて照れくさそうに頭を搔き、手招きした。

「早く行かないと、冷めちゃうよ」

カエデは黙つたまま立ち上がり、頷いた。雲八は笑みを浮かべて、リビングの方へ向かう。

……カエデはそつと、自分の左手を見つめた。“あの人”に壊され、新しく博士につけた左手は、全く痛みもなく、自分の体の一部として正常に機能している。

しかし、今でも突然思い出すことがあるのだ。あの、火がついたような鋭い痛みの感覚を……。

「はい、カエデの分。量はこのくらいで良かった？」

「……はい。すみません。ありがとうございます」

「これ、スプーン。あと、この箸はカエデ用だよ」

カエデは、雲ハから、まるで桜の花びらのように甘く美しい桃色をした箸を手渡された。もう片方の雲ハの手には、透き通るように青い色をした箸が握られている。

「じゃ、食べようか。俺、カレー好きなんだよねー」

雲ハは満面の笑みを浮かべて両手を合わせた。

「いただきまーす」

小さな子供のように、大きな声で食事の挨拶をする雲ハ。そんな彼の横顔を、カエデは不思議そうに眺めた。カエデの視線に気がついたのか、雲ハは首を傾げて彼女の顔を見た。

「ん？」

「……いえ、なんでもありません」

「あ。人として、挨拶はきちんとしないといけないからね。俺の同居人になつたからには、挨拶はきちんとー」これ、約束だから

「……りょ、了解しました」

「(1)飯食べるときも勿論挨拶しなくちゃダメだよ」

「は、はい……」

カエデは少し戸惑いながら、自身の手をあわせ、小さな声で呟いた。

「……いただき、ます」

雲ハはそれで満足したのか、笑顔を浮かべて頷き、

「じゃあ、食べようか。」

と明るく言って、カレーを口に運んだ。

## 第1-3話 優しい言葉

食事の後、カエデは食器を洗っていた。雲ハガ、「俺が洗うよ」と言つたが、カエデはそれを断つた。「いいえ、これは私の仕事ですから」「……と。

冷たい水で、カエデは食器を洗い流す。

……あの男に雇われていた1ヶ月、良い思い出などひとつもない。思い出すのも嫌になる、おぞましい毎日……。  
本当は思い出したくない。覚えてなんていたくない。だけど、どうしても思い出してしまう。  
思い出したくない。思い出したくない。思い出したくない。

常に命を削られていた、恐怖の日々。今考えると、あの男は最初から自分を痛めつけるためにロボットを購入したのだろう。  
ロボットであれば、例え“殺害”しても警察には捕まらない。ロボットは、例え心があつても、本物の人間から見れば“物”でしかないのだ。

「一。」

そんな事を考へていたら、何かが自分の両手から滑り落ちた。その瞬間、鋭い音が台所中に響き渡つた。……食器が割れたのだ。

カエデはその音を聞き、また嫌な事を思い出してしまつた。両手に涙を浮かべて、その場に蹲る。悲鳴をあげてはいけない。近所迷惑になる、と何度もあの男に怒鳴られた。殴られて、床に引き倒され、蹴られて、……。最終的には、機能停止にまで追い込まれた。悲鳴をあげてはいけない。

「……カエデ、どうしたの？」

背後で雲八の声がした。カエデは、慌てて振り返り、立ち上がった。

「……も、申し訳ございません。ご主人様……」

「ああ、割れちゃった？　いいよ、俺が片付けておくから風呂にでも入つてきなよ。パジャマとかまだ買ってないから俺のジャージでいい？　あれ？　つていうか、風呂入れるよね？　確かに説明書にそう書いてあつたけど」

「あ、あの……」

「もしかして入れないっけ？　特殊防水加工がしてあるとか何とか

……

「お、お風呂には入れます。人間とほぼ近い状態に作られていますので。それより、その……私が片付けますので……雲八様は、お先にお風呂こ……」

「いや、いいよ。このくらいは俺にも出来るから

そう言つてしまがみ込んだ雲八は、カエデの目の前に散らばった皿の破片を集め始めた。カエデは暫くその場に立ち廻らし、それから消え入りそうな声で呟いた。

「……申し訳、『やじません。私……役に立たなくて……』

雲八は一度、破片を拾う手を止めた。そして、振り返らずに、カエデの名を呼んだ。

「カエデ」

その真剣な聲音に、カエデは一瞬緊張して声が出なくなつた。

「は……い。なんでしょうか」

「……ダメだよ」

「え……？」

「自分の事を役に立たないとか、言つちやダメだよ。君はもっと自分に優しくならなくちゃ」

その言葉は、カエデの傷ついた心に衝撃を与えた。……厳しく、そしてあまりにも優しすぎる言葉だった。

「……わ、わた……わたくし、は……」

何か言葉を紡ぎましたが、舌がもつれて何もいえなくなつた。暫くの沈黙の後…………カエデの瞳から、透明な液体が流れた。ふと振り返つてその涙を見た雲八は慌てふためき、焦つたようにカエデの頭を撫でた。

「わっ！」「め……つ、その、ダメっていうのは、ええつと……」「ち、違います……すみません。……こういうの、慣れていないので」

「え……？」

「私は……以前の雇い主様から自分は役立たずなのだと教えられました。……」主人様のように、優しい言葉を掛けてくださった方は、博士以来で……

鼻をすするカエデ。雲八はそんなカエデの涙を、そつと片手の親指で拭つてやつた。

「君は、役立たずなんかじゃないよ。だから、もう、そんなこと言つちゃダメだ」

## 第14話 安らぎ

結局破片の処理は雲ハに任せて、カエデは湯船に浸かっていた。良い香りのする入浴剤。暖かいお湯。今までに経験したことの無い安らぎを感じた。

それから、先程雲ハに言われた言葉の意味を噛み締めた。

……自分はこの世界に存在していても良いのだ。自分がこの世界に生まれたことは、意味の無いことではなかつたのだ。心の中がむずむずして、言葉が上手く紡げなくなる。これが嬉しいという感情なのだ、とカエデは思つた。

人間なんて大嫌いだつた。人間を見るだけで体が動かなくなつた。でも、変われるかも知れない。の人と一緒にいれば……。

風呂から上がり、リビングへ戻ると雲ハはテレビを観ていた。気配に気がついたのか、彼はこちらを見て、ああ、と小さく声を上げた。

「あがつたんだ。ジャージ、やつぱり大きいかな……。明日あたりにでも、服買いに行こうか。他にも色々買わなきゃいけないし」  
「……」

「あ、じゃあ俺、風呂入つてくるよ。眠かつたら先に寝てていいからね」

雲ハはそう言い置いて立ち上がると、扉の向こうに消えた。

カエデは静かにその場に座り、雲ハが観ていたテレビをぼんやりと観てみた。どうやら、お笑い番組らしい。人間と違つて複雑な感情が無いカエデには、芸人が披露しているネタが面白いのかそれとも面白くないのか、あまり理解できなかつた。これ以上これを觀いても、何の得にもならないだろう。そう判断し、テレビの電源を切

つた。

体の中から、小さな電子音が聞こえる。これは、そろそろ就寝した  
ほうが良い、という合図だった。

# 第15話 惡夢

恐い

暗い部屋。タバコのにおい。人の笑い声。自分の首や足に巻きつけられた鎖が、ジャラジャラと耳障りな音を立てる。誰かが自分を指差して笑う。誰かが何かこちらに向かつて叫ぶ。

「いや……ご主人様……やめ、て……くださ、」

あんが言ひたが、おいお見ゆる。モリナガに見ゆれ。

「そんじゃ、開始しまーす」

耳元で、大きな電動ノコギリが音をたてて動き始めた。

「エーテ。エーテ！」

1

目の前に、心配そうな雲八の顔があった。仰向けにベッドに寝転んでいることから、自分は部屋で眠りに落ちていたのだ、ということを思い出した。

……今のは夢だったのだろうか。あまりにもリアルで、今自分がどこにいるのかすら、一瞬わからなくなつた。

「大丈夫? ……びっくりしたよ。突然悲鳴をあげるから」

「……も、申し訳、ござこま、……せ、ん」

「いや、俺は大丈夫だけど……。顔色、悪いよ?」

「へ……平氣です。すみませ、でした……」

「本当に? ……何かあつたら言いなよ?」

「はい……」

雲八は心配そうに、何度も振り返りながら部屋を出て行つた。そこでようやく、彼が自分の悲鳴を聞いてこの部屋に駆けつけてくれたのだと理解した。

全身汗だくで、髪の毛が額にはりついてしまつている。カエテはそれを右手で払い退け、改めて辺りを見回して安堵した。

「……は、あの男の部屋ではない。

## 第16話 呼び名

翌日カエデが田を覚ますと、既にリビングには朝食が用意されていた。

「……」

「あ、カエデ。おはよう」

「……おはよーい」やいます」

「パンはバター派？ それともジャム派？」

「どちらでも構いません」

「それじゃあ、ジャムで」

雲八は鼻歌を歌いながら、器用にトーストへジャムを塗り始めた。

「……申し付けてくだされば、私が引き受けましたのに」「はは、そうだね。今日はちょっと早く田が覚めたから。明日からはカエデにお願いするよ」

カエデは、雲八から手渡されたトーストを頬張つた。甘みのある苺の香りが、口の中に広がる。

「今日は買い物に行こうか」

「……買い物、ですか？」

「うん。色々買わなきゃいけないものもあるし」

「ですがご主人様、大学が……」

「今日は休むよ。眞面目に出てるし、単位はまだ平氣だろ……多分」

雲八はそう呟き、カエデに向かつて微笑みかけた。

「じゃ、食つたら行こうか

カエデは無言のまま、小さく頷いた。

「……ご主人様」

「ん？」

「ご主人様は

……」

何かを言いかけたカエデだが、すぐに彼女は口をつぐんだ。

「……え、なんでもありません」

「？」

同じ大学生なのに、あの人とは随分雰囲気が違いますね。

……カエデは心の中でそう付け加えた。

「デパートはね、すぐその……、あの大きい建物。歩いて5分くらいで着くから」

「……はい」

食器洗いを済ませたカエデは雲ハに返事を返し、タオルで両手を拭いた。

この日の天気は、快晴。マンションの外に出た瞬間、カエデはそのままの青さに驚いた。

「うわ、すごい晴れてるなー」

雲ハは誰に言いつでもなくそつと咳き、眩しそうに目を細めた。

「じゃ、行こう」

「はい」

「あ、そうだ。あのや、」

「はい？ 何でしょうか」

「えーと、その……」

雲ハは少し照れ笑いを浮かべて、頬を搔いた。

「できればいいんだけどさ。“『主人様』”っていうの、別の呼び方にできないかな？」

「構いませんが……何故でしょうか？」

「ええと……なんか、恥ずかしいんだよね。慣れてないしさ、こういうの」

「了解しました。何とお呼びすれば宜しいですか？」

「んー、……普通に、雲ハでいいよ。その方が、同居人って感じがするでしょ」

その時、カエデの心の中に、何か良く分からぬ感情が芽生えた。カエデはその感情の正体に気づくことができなかつたが、一応、頷いておいた。

## 第17話 人

「デパートは酷く混んでいた。

右を見ても、左を見ても人しか見えない。

人の波に流されそうになり、雲ハは両足をしつかりと地面にくつつけた。

「あちやー……バーゲンセール、かな。ごめん、カエデ。いつもはこんなに……」

混んでないんだけど、と言い掛けた雲ハの片手を、カエデの汗ばんだ手が突然握り締めた。

「え。カエ……デ？」

カエデは蒼ざめて体を小刻みに震わせながら、雲ハの手を握つている。

沢山の人間を見て、また昔のトラウマが彼女の脳内に蘇ったのかもしれない。

雲ハは慌ててカエデの手を強く握り返し、カエデの顔を覗き込んだ。

「カエデ……。大丈夫？」

カエデは雲ハと繋いでいないほうの手を自分の額にもつていき、脂汗を押さえながら、小さく頷いた。

しかし、どう見てもカエデのその姿は大丈夫そうには見えなかつた。

「カエデ、ちょっと人の少ないところに行こつか。4階だつたら、子供の遊び場だから……。多分、人も少ないと思つ。多分ここよりは

「マジだと思つよ」

「……は、はい……。すみません、ありがとうございます」

「うん、いいよ。行こう」

雲ハは今にも倒れそうなカエデの手を引いて、人混みを掻き分けながらエレベーターに近づいた。

しかし、エレベーターの中にも沢山の人いるのを見た雲ハは、慌ててエレベーターから離れて階段に向かつた。

「カエデ、歩ける?」

「はい、平氣です……」

ふらふらのカエデを支えながら、雲ハは1段1段慎重に階段を上った。

## 第18話 好奇心

4階では、小さな子供たちがはしゃぎ回っていた。その子供たちの母親らしき人たちが、少し離れた場所にある椅子に座って談笑している。ここも静かだとはいえないが……先程よりは、まだマシだろう。

「ちょっとここで待つてて、カエデ。飲み物でも買つてくるよ」

「……」

「自販機、確か1階にあったと思うから……ちょっと遅くなるかも知れないけど、すぐ戻つてくるよ」

「……」

返事をせず、ただ震えているカエデを見て、雲八は、やれやれと自分の首筋をさすつた。これは自分が困ったときの癖だつた。とりあえず、今は彼女をそつとしておいた方が良いだらう。

「じゃ、行つてくる」

雲八はそつ言い置いて、階段を下りていった。

カエデは、額に右手を当てたまま目を瞑り、その場に立ち尽くしていた。

気分が悪い……。人間が沢山いる。微かにタバコのにおいもある。頭痛がしてきて、カエデの眉間に小さくしわが寄つた。

その時だった。

「あれえ？　お姉ちゃん、不思議な田の色してるーー。」

田の前で、誰かの声がした。ハツとして田を開けると、そこには大勢の子供たちがいた。子供たちは皆、好奇心いっぱいの瞳でカエデを見上げている。しかし、カエデにとつては、そんな彼らも“恐ろしい人間”でしかなかつた。

「……っ」

更に蒼ざめて、後ずさるカエデ。子供たちは田を輝かせながら、カエデを壁際に追い詰めてゆく。

「ねえお姉ちゃん。なんでそんなに不思議な田の色なのー？」

「外国から来た人なの？」

「どうして？」

「ねえ、どうして？」

カエデの体が小刻みに震え出す。口に手を当て、カエデはその場に崩れ落ちた。足が震える。全身に鳥肌が立つた。

「や……やめて……」

必死に声を絞り出しが、子供たちの耳には届かない。

「ねえ」

「どうしてー？」

「教えてよ、お姉ちゃん」

「いや……お願ひ、……やめて……思い出したく、ない……！」

カエデは大きく首を横に振りながら両耳をふさいだ。忘れない記憶が、また蘇つてくる。

# 第19話 漆黒の瞳

いつものように、暗闇の中で震えながら眠つていたあの夜。誰かの話し声で、田を覚ました。

「ねえ翼一。ほんと」「面白いもんなんであるのー?」

ほんとがでま見られかる

その瞬間……螢光灯が、光を放つた。あまりの眩しさに驚き、咄嗟に眼を瞑る。すぐ目の前から、聞きなれない女の声がした。

「うつわ！ すごい！ 何こいつ、人間？」

恐る恐る目を開けると、そこには派手な格好をした女性が立っていた。唇に大きなピアスをつけている。アイラインを濃く引いているためか、目が物凄く大きく見えた。

「ねえ、あんた名前はあ？」

004号、  
であります。

一  
へ?  
何?  
せろせろ  
? ?

後ろに立っていた男が、笑い声を上げて女に耳打ちした。

「 いっせ、ロボットなんだぜ！」

「え？ ロボット？」

「ああ。すっげえだろ？ お前、言つてたじやん。自分の思い通り

になるヤツが欲しいって

「え！ じゃあ、もしかしてアタシのために買ってくれたの？」  
「決まつてんだろ」

「やあ～んっ！　ありがとう翼あ～！」

知らない女性。香水の香り。彼女の瞳に移る、自分の顔……。カエデはその全てに怯え、震えながら後ずさった。

「ねえ、翼あ

「なんだよ」

「この子、可愛いけどさー……あたしの好みじゃないなあ～」

「はあ～？　何でだよ」

「あたし、細かい装飾が地味なオモチャ、嫌いなんだよね～」

「細かい装飾？」

“雇い主”がそう呟いて片眉を上げると、女性は意味ありげに微笑み、頷いた。

「そりゃ。例えば……」

女性が指差したのは、……カエデの瞳だった。

「いのへんとか、ね

その当時、カエデは美しい漆黒の瞳をしていた。女性はそれを『気に入らない』と言つたのだ。その言葉の意味を理解したカエデは、両目を大きく見開いた。

「……な、何を……言つて、」

舌がもつれて、急速に喉が渇いて、声が出なくなつた。あまりの恐怖に、目の前が真っ暗になる。

カエデのその反応を見て、“雇い主”も理解したようだ。

「ああ、……なるほど。お前、結構エグいこと考えるよなあ」

「あははっ！ 翼には敵わないよお～」

“雇い主”がカエテの前にしゃがみ込んで、口の端を吊り上げて囁つた。

「俺のカノジョがこいつにいるんでね。……悪いけど、協力してもらひひ」

今でも、その時のことは鮮明に思い出すことができる。彼の瞳は酷く濁っていて、世界の悪いものを沢山吸い込んできたような色をしていた。

「いや……嫌です！ 一体、何をするつもりですか！」

「ま、すぐわかるって。おい、引き出しだからカッター出せ」

「わかつてるって。……ははは」

女性は楽しそうな笑顔を浮かべ、机の引き出しの中からカッターナイフを取り出した。

「じゃ、ちょっと痛々かもしんねえけど、ここつの為なんで我慢してくれよ」

小刀を握り締めたまま、近寄つてくる彼。

「何それ！ もお、翼あ。アタシのせいにしないでよねえ～

彼の後ろで、大きな笑い声をあげている彼女。

「いや……やめてください…！」

逃げようとしても、勿論無駄だった。手足につけられた鎖が、がしゃりと音を立てて自分の体を壁に引きつけた。

「そいつ、押さえろよ。朱音」

「はいはーいっ」

「嫌！ 嫌っ！ 離してください…！」

## 第20話 造られた人間

その夜 …… カエテは、漆黒の瞳を失つた。

「ひ……ひ……」

床に突つ伏して、声にならない声をあげるカエテ。全ての景色を失つた両耳。…… 説明すら出来ないほどの激痛が彼女を襲う。

「声も出ないくらい痛いみたいねー」

「そりや そうだらうな。でも、壊れなくて良かつたぜ。正直こんなことしたら、精巧なロボットってのは壊れると思つてたからよ」「うん。壊れなくてよかつたあ。…… でもまさか血まで出るよつになつてるなんて、アタシちょっとびっくりしちゃつた~」

「偽物だから怖がる必要はねえよ。血のりみてえなもんだ」

「ふーん」

2人の会話が、どこか少し離れた場所から聞こえる気がした。あまりの痛みで両耳の機能まで鈍つってきたようだ。

ここにきてから、痛みには慣れたと思っていた。それなのに……。

「で、このドビウスさんの？ 翼」

「まあそつ櫛てるなつて。お前のことだからこのドビウスもあるかと思って、そういう系の専門店探しておいたんだよ。ドビウスを買つた場所じゃ、どうせ開発者のジジイがなんでこんなことになつたとか詳しく聞いてくるに違ひねえからな。それより、朱音。ドビウスの田の色何色にするか決めるよ」

「え、アタシが決めていいんだ？ じゃあ……赤と青とかどいつ？」

結構オシャレじゃない？」

「赤と青?

……「うん、いいかもしんねえな」

小さく笑い声をあげたその男は、カエデの髪の毛を掴んで、こう言った。

「いかにも、『造られた人間』って感じで」

## 第21話 修理

それから、暫くの間カエデは気を失っていた。どれ程時間が経つたのかはわからない。目が覚めたら知らない店のソファの上に寝かされていて、先程まで痛みしか感じなかつた両目には再び光が戻つていた。

「目が覚めたか？ ロボットさん」

振り返ると、何度もどこかで見たことがある中年の男性が立つっていた。

「…………あなたは…………確か、博士の…………」

「ああ。驚いたな、覚えてるのか？ 大野博士の弟子だつた、東山だ。お前が造られた日に一度大野博士の研究室で会つただけだから、もう忘れてしまつてはいると思っていたよ」

東山は片手で眼鏡を押し上げ、カエデの瞳を覗き込んだ。

「両目はちゃんと見えるか？」

「…………はい。問題ありません」

「せうか。それじゃ、仕上がりの方を確認してくれ」

手鏡を手渡され、恐る恐る自分の顔を見る。……その瞬間、カエデは、自分の瞳の色が変わつた事を知つた。

「…………」

震える指で、鏡の中の自分の瞳を撫でるカエデ。いつの間にか溢れ

出した涙が、鏡に落ちていった。

カエデは、黒い瞳が気に入っていた。大野博士が造ってくれた証、あの研究室でうまれたという証、それが一つ消えてしまった。残念で堪らなかつた。

声をあげずに泣き出したカエデを見て、東山は辛そうに手を伏せた。

「……ロボットさん」

返事を返すことができず、カエデは泣きじりながら東山の方を向いた。

「……この店は、他の研究所に持ち込むことのできない理由のあるロボットを、極秘に修理するための場所なんだ。よっぽど辛いことがあつたんだろう。両目を潰されて連れてこられるロボットなんて、今までここで商売してきて初めて見た。でもな、……今言ったように、ここは依頼人の意思を尊重して、他の研究所にお前さんのデータを漏らすことはできないんだ。……たとえそれが、師匠の研究所のロボットだつたとしても」

東山は必死に言葉を選びながら説明しようとしているが、かいつまんできえばこういうことだ。

004号がもし雇い主に暴行を加えられていたとしても、それを外部に漏らすことはできない。つまり、誰にも助けを求めさせることができない。

「……依頼人、あなたの雇い主さんな。そろそろ迎えに来ると思ひます。準備しどきな」

「……はい」

東山は、頬に残ったカエデの涙の跡を指先で拭い、消え入りそうな声でこう言った。

「悪いな、俺は、大野博士のような偉大な人物にはなれなかつた。  
……弟子失格だ。俺みたいな人間は、こういう仕事しないと、今の世の中で生きてはいけないんだ」

カエデは小さく頷き、視線を床に落としたまま店の入り口に立つた。そして、東山の方を振り返らず、吐き捨てるように呟いた。

「……いいんです。人間の汚いところは、嫌というほど見てきましたから」

誰も、助けてはくれない。

## 第22話 暴走

気がつくと、カエデの両目からは涙が溢れ出していた。

「……そうだ。誰も、助けてなんかくれなかつた。

「あれ……」

「お姉ちゃん?」

「どうして泣いてるの?」

どんなに辛くても、苦しくても、誰も助けてくれなかつた。

「お母さん! お姉ちゃんが泣いちゃつたよ!」

「あっ! ゆうちゃん、このお姉ちゃんに何したの!」

「なんにもしてないよう。急に泣いちゃつたの」

「なんにもしてないなんてこと、ないでしょ? ほら、お姉ちゃんに謝りなさい!」

目の前で何か言つているこの親子も、人間。人間は何もしてくれない。人間は、薄汚い考えを持つた自己中心的な生き物なのだ。カエデは憎しみのこもった瞳を親子に向か、片手を振り上げた。

「一!」

何者かの温かい手が、振り上げたカエデの手を掴んだ。驚いて振り返ると、そこには笑顔を浮かべた雲八の姿があつた。

「…………雲八、様……」

「カエデ、お待たせ! 飲み物買って来たよ

雲八はすぐに親子の方に顔を向けて、小さく頭を下げた。

「ここの子、外国から来たばかりで、まだあまり日本語を理解できないんです。多分、沢山の人に声を掛けられて驚いてしまったんだと思いません。驚かせてしまってすみませんでした。……それじゃあ、失礼します」

雲八は優しくカエデの手を握ると、何も言わずに、屋上へ続く階段を上り始めた。

カエデは少し戸惑いながらも、雲八の手をしつかり握つて、その後についていった。

## 第23話 屋上

2人は屋上にやつて來た。今日は風が強く、少し肌寒い。雲八に渡されたりんごジュースを手に持つたまま、カエデは俯いて壁にもたれかかっていた。雲八はここに来てから地面に座り込んで、すっかり口を開ざしてしまっていた。

「……」

沈黙。

風の音だけが2人の耳に届く。

「……」

雲八がこんなに静かになってしまったのは、きっと自分のせいだ、とカエデは思った。こんなに扱いにくいロボット、そばに置いておきたくなくなつたのかも知れない。更に落ち込んだカエデは、溜息を吐いて赤くなつた瞳を擦つた。

「……ごめん」

数分後、不意に聞こえた、雲八の声。

「……？」

慌てて顔をあげて、雲八の方を見る。雲八は立ち上がり、カエデの方に近寄ってきた。

「反省してるんだ」

「……反省?」

「……うん」

雲ハは、いつものように優しくカエデの頭を撫でて、すまなそうに呟いた。

「こんな人が多いところに、君を連れてくるべきじゃなかつたよね」「……え」

意外な言葉に、カエデは言葉を失つた。てっきり、“君を買ったのは間違いだつた”とでも言われると思っていたからだ。

「さつさと買ひ物済ませて、帰ろい」

「……は、はい……」

「必要なものだけ買おう。君の着る服と、今日の夕飯の食材」「わ、わかりました」

「それじゃあ、行こうか」

雲ハは笑顔でカエデに手を差し伸べた。

カエデは、思わず笑みを浮かべて、大きく頷いた。

「……はい」

## 第24話 莺生えた感情

帰る頃には、太陽は真上にまで昇っていた。丁度お昼時らしい。

「家に帰つて、何か食べようか」

「はい。今日買った材料で、ハンバーグなら作れると思います」「お、ハンバーグ？ 僕、好きなんだよね～。楽しみだなあ」

嬉しそうに笑う雲八。その笑顔がいつにも増して輝いているように見えて、カエデは首を傾げた。

「雲八様」

「ん？」

「……何か良い事があつたのですか？」

「え、なんで？」

「なんだか……、『機嫌が良さそうなので』

「はは、わかる？」

雲八は笑顔のままでカエデの顔を覗き込んで、優しげに目を細めて、こう言った。

「カエデがやつと笑つてくれたから、嬉しくなつちゃつて

その笑顔を見た瞬間 …… カエデは不思議な感覚を味わつた。

それは、心がまるで何かに縛め付けられたような感覺だつた。

一体これはなんなのだろうかと必死に頭を回転させて考えてみる。しかし、答えは出でこなかつた。

「……雲八、様？」

「え？ 何？」

「あの……私が笑うと、雲八様は嬉しいですか？」

「へ？ どうしたの、突然」

「いえ……少し、気になつて」

雲八は不思議そうな顔をしながらも、少し顔を赤らめると、小さく頷いた。

「……うん、嬉しいよ」

その返事を聞いたとき、カエデの胸は高鳴った。何故なのだろう。  
……わからない。

「雲八様」

「ん？」

「あの……わ、私も……同じです」

「……何が？」

「私も、雲八様の笑顔を、見ると……嬉しい、です」

あの感覚は“嬉しい”のとは少し違うような気もしたが、雲八は自分の笑顔を見た時の感情を“嬉しい”と表現した。つまり、自分のこの感情もきっと、それと同じなのだろう。カエデは取り敢えず納得して、1人で頷いた。

## 第25話 鳥

部屋に戻つてくると、カエデはすぐに食事の準備に取り掛かつた。……いつも雲ハが歌つている鼻歌を口ずさみながら。

「雲ハ様、すみません。ケチャップを取つて頂けますか？」  
「あ、うん。はい」

目の前に置いてあつた赤い調味料を手渡すとカエデは、ありがとうございます、「ござります、と雲ハに頭を下げ、出来上がつたハンバーグにそれをかけた。まだ出来立てで、熱々のハンバーグ。美味しいそうな匂いが部屋中に漂つている。

「『』飯とお味噌汁は出来ていますので、これから準備致します。雲ハさまは向こうでお待ちください」「わかった。じゃあ、よろしく

雲ハはカエデのその言葉に素直に頷いて、居間の方へと消えて行つた。

カエデは『』飯を器によそいながら、小さく微笑んだ。

博士。人間の中にも、こんなにも優しくて温かい人がいるのですね。

「……あ、」

『』飯を盛る手を止め、カエデは窓の外を見た。……曇りガラスの向こうに、黒い物体が動いているのを見つけたからだ。カエデは静かに窓を開けると、そこに居る生き物に向かつて笑みを浮かべた。

「……カエデー、やつぱり運ぶのへり手伝おうか？」

そう言いながら台所へ入ってきた雲ハは目を丸くした。カエデはとても幸せそうな顔をして、窓の外を眺めている。

「カエデ？」

首を傾げながらその顔を覗き込むと、カエデはハツとしたよつに雲ハのほうを向き、あつと小わけ声を洩らした。

「お待たせして申し訳御座いません、雲ハさま。い、今すぐ準備します！」

「いや、別にいいよ。それより……何見てるの？」

「……あの子、です」

カエデが指差したのは、目の前の電信柱から伸びている電線だった。その電線の上に、とても綺麗な色をした、見たことの無い小鳥がとまっている。

「うわー、すげえ……」

雲ハはその美しさに、思わず目を細めて感嘆の声を洩らした。その言葉が嬉しかったのか、カエデは目を輝かせて頷く。

「あの子、私がここに来たときからこの窓に遊びに来てくれるんです。どこから来た子なのかはわかりませんが、とても可愛らしくて……。ついつい、少しご飯を分けてあげたりしているうちに、仲良くなつたんです」

「へえ、そなんだ」

「……はい。あつ、あの……すみませんでした。勝手に『』飯を分けてあげたりしてしまって……」

「いいよ、あいつも喜んでるだろうし。それにしても綺麗な色した鳥だなあ……。どこから来たんだる」

「わかりません……。気がついたら、遊びに来てくれるようになりましたが……」

2人は暫くそのまま、ぼんやりと窓の外を見つめていた。美しい小鳥は、嬉しそうに電線から空へ飛び立つたり、再び電線に戻つてみたり、時には2人が見ている窓のすぐ近くまで飛んでみたりと、せわしなく動き回っていた。その姿を、まるで我が子を見る母親のように優しい目で見つめていたカエデは、ふと思いついたように片手を口に当てた。

「……あ!『』めんなさい。『』飯、すぐにお運びします。少々お待ちくださいね」

カエデは雲ハと田が合ひつと、微かに微笑んだ。雲ハもその笑みを見て、自然と笑顔になる。

「わかった、待ってるよ」

## 第26話 友達

その翌日、カエデは部屋の掃除をしていた。部屋の中が綺麗になると、心の中まで綺麗になるような気がして何となく嬉しい。

ふと時計に目をやると、針は午後5時を指していた。雲ハは大学に行っている。……そろそろ帰つて来る時間だらうか。

それから数分ほどテーブル拭いていると、玄関の方で物音がした。

「…………雲ハさま？」

すぐさま玄関に向かい、そう声をかける。すると間髪を入れずに扉が開いて、返事が返ってきた。

「カエデ、ただいま」

雲ハの笑みを見た瞬間、カエデはふっと心が安らいだような気がした。彼の笑顔には、自分を安心させてくれる何かがある、とカエデは感じていた。

「おかえりなさい。お鞄お持ちしましようか？」

「あ…………いや、…………ええと、その。…………ちょっとといいかな」「はい？」

首を傾げた瞬間、玄関の扉の向こうに雲ハ以外の誰かの気配を感じて、カエデははつと身構えた。

雲ハは慌てて扉を少し閉めて、小さな声でカエデにこう説明した。

「あのさ、実は同じ大学に高校時代からの友達がいるんだけど、遊びに来たいっていうから連れて来ちゃったんだ。もしカエデが嫌だ

つて言うなら帰つて貰うけど……どう、かな?」

「……」

口を閉ざし俯いてしまったカエデを見て、雲ハは酷く焦つてしまつた。頭を搔き、カエデの目を見たり少し焦点をずらして部屋の壁を見てみたりと、無意味な目線の動きを繰り返す。

「あ、ええつと……悪い人じゃないから安心して。カエデのことは親戚の子だつて説明してあつて……、」

「……です」

「えつ？」

カエデは小刻みに震える手を胸の前で握り締めて、精一杯笑みを浮かべた。

「ぐ、雲ハ様のお友達なら、大丈夫です。私も以前よりは人に対しう免疫が出来ましたから」

「……本当に?」

「はいっ」

明らかにカエデは無理をして笑みを作つてゐる。雲ハはそのことに薄々感づいていたが、正直今更友人を追い返すことも出来ず、カエデの言葉に甘えることにした。

「そう? 良かつた。それじゃあ、入つてもらつから」

「は、はい……」

カエデは少し後ろに下がり、こくりと唾を飲み込んだ。雲ハは申し訳なさそうにごめんと呴いてから、玄関の扉を開け、外で待つている人物を招き入れた。

「それじゃ、入って。あ、あんまりひるむなよ。親戚いるか

ら」

「はいはーい！ わかつてゐるつてー」

その声を待つていたかのように元気良く返事をしながら入ってきたのは、小柄な女性だつた。友達、といつ言葉から何となく男性をイメージしていたカエデは少し驚いて目を丸くする。それでも、粗相の無いよう迎えなければ、と強張つた頬の筋肉を無理矢理ほぐし、引きつった笑みを浮かべてその女性を見た。

「……い、いらっしゃいませ」

そんなカエデを見て、女性はぱつと皿を輝かせた。

「きやあー。もしかしてこの子が雲八の言つてた親戚の子？ 可愛い子ねー。あんたと同じ血筋だなんて想像もできないー！」

「……それ、どういう意味だよ」

雲八は軽く女性の頭を小突き、苦笑いする。

「こつたあ。もう、オンナノ口に手を出しちゃ駄目でしょ、馬鹿八一！」

女性は頭をさすりながら雲八にそつまつて舌を出すと、素早くカエデの方に向き直つて笑いかけた。

「あたし、モカつていうの！ よろしくねーー」

「…………あ…………は、はい。わたくしはカエデと申します。宜しくお願  
いします」

「さやああああもんとかわいい！この子あたしの妹にするー。」

「冗談っぽく笑いながら、モカは勢い良くカエデに抱きついてきた。カエデは一瞬びっくりして心臓が止まりそうになつたが、なんとか冷静を装つてモカを受け止めた。

## 第27話 嫉妬

興奮してカエデに頬をすりよせるモ力。カエデは困惑し、どう対処すべきか必死に頭を回転させる。困っていることに気がついてくれたのか、雲ハがモ力の肩を叩き、言った。

「モ力。コーヒーでも飲む?」

「あ、ほんと? ありがと! えっとね、ミルクだけでいいよー」

モ力はカエデから体を離すと、こっちがキッチンー? と言いながらどたどたと部屋の中へ入っていった。

「……お前、ほんとお構いなしなだなあ……。まあ、いいんだけど」

雲ハは苦笑しながらそれに続いて部屋の中へ消えて行つた。そしてカエデはといふと、暫くそこに呆然と立ちつくしていた。  
自分の中に、今まで感じたことの無い不思議な感情が芽生えたからだ。この感情は何なのだろう? 解らない。分析してみると、悔しさに似た感情のようだった。

カエデは分析を諦めて溜息を吐き、頬に片手を当てる、ふと気がついたように天井を見上げた。

(……そうだ。……私は……、)

ロボット、だつた。

人工的に造られた肺で呼吸し、人工的に造られた心臓を動かして生存している。最近、雲ハが自分を人間のように扱ってくれる為、その事実をすっかり忘れていた。

嬉しさ、悲しみ、怒り、苦しみという感情は最初から自分の中に組

み込まれていて。悔しさは、以前の雇い主に殺された時、自分自身で気づいた。だが自分は、まだ分からぬ感情だらけなのだ。

人間なら、きっとこの感情の名前がわかるのだろう。でも、自分には解らない。

ああ、なんなんだろ？ この、悔しさに似た、悲しみのような、不可思議な感情は……。

雲八の笑顔が他の人間に向けられているのが悔しいと思った。自分の知らない人と親しげに喋っているのを見るのが悲しいと思つた。一体これはなんなのだろう。

(……私は故障してしまったんだろうか)

胸が苦しい。……張り裂けそくなぐらい、痛い。カエデはぎゅっと両手を瞑つてその痛みに耐えよつとした。

「カエデちゃん」

自分の名前を呼ぶ、モカの声。カエデはその声で我に返り、慌てて返事を返した。

「は、はい！」

「こっちにおいでよー！ 一緒に喋ろー？」

「了解しました」

急いで部屋に向かい、手招きしているモカのすぐ隣へ腰掛ける。モヤモヤしたその感情は、未だにカエデの心の中を支配していた。モカはそんなカエデをよそに、笑顔で雲八の背中を叩く。

「ねー、雲八さあ、知つてたー？」

「……へ、何を？」

「あたしねえ、実は高校のとき、あんたのこと好きだつたんだよー」

「……え、」

瞬きを繰り返して、言葉を失う雲八。一瞬室内が静かになり  
その沈黙は、モカの笑い声に打ち破られた。

「きやはははっ！ 昔のハナシじゃあーん！ 何動搖してんの！  
それとも何？ 嬉しそぎて言葉も出ないつて？ ん？ ん？」

「い、いや……。別に嬉しいとかそんなんじやないけど、意外だな  
と思ってさ」

「意外って、何が？」

「だつてさ、俺らの間ではお前はD組の吉田が……」

「ええ～？ 吉田とかありえないでしょ！ あんたたち、どんな頭  
してんのよー！」

2人は、カエデの知らない話で盛り上がっている。カエデは黙つて  
絨毯に目を落としていた。……胸の痛みが、強くなつていく。

「……あ。そういう、カエデちゃん！」

「……！」

急に名前を呼ばれ、カエデは慌てて顔をあげた。

「ふふっ。雲八にね、カエデちゃんは高校生だつて聞いてたから、  
本屋に寄つていいいもの買つてきたんだ！ ……ちょっと待つてね」

モカは妖しい笑みを浮かべて鞄をあさり始めた。そしてその中から  
3冊の漫画の単行本を取り出すと、それをカエデに手渡した。

「はい、あげるー。」

「え……、え？」

「これね、今中高生の間ですつゞに人気のある漫画なんだよー。なんかねえ、泣ける恋愛モノらしいから、読んでみなよー。」

「そう、なんですか……。ありがとうございます」

「いじつていじつてー。」

モカはにこにこと笑みを浮かべてちう言つと、このパン屋ー美味しいねー、どこのやつ? と雲ハに尋ねながらパン屋ーをすすり始めた。

「てかせ、雲ハ。こないだ駅前に出来たパン屋さんなんだけど……って、あつ! もつこんな時間じゃん!」

モカは腕時計に目をやつて悲鳴をあげ、

「じめん雲ハ、カエテちゃん! あたしこれからバイトなんだ。帰るねー!」

と早口で言つて、慌てて立ち上がつた。

「送る? か?」

「え? あ、うづく。ひとりで帰れるから平氣。じゃあね、カエテちゃん! あと、ついでに雲ハー!」

「つ、つこでつてお前……。氣をつけろよー。」

「うん! そんじゃねー!」

モカはもう一度カエテに手を振ると、風のよつと去つていつてしまつた。

## 第28話 買い物

それから数日後のことだった。その日カエテは、近所のスーパーまで買い物にやつて来ていた。

(卵を1パック……それからお肉と野菜も)

購入するものをメモした紙を見ながら、卵売り場へ向かう。

「あら、お姉ちゃん可愛いわねー。ネギ、お安くしつくけど、いかが?」

少しふりくらとしたおばさんに笑顔で話しかけられ、カエテは一瞬戸惑ったように視線を泳がせた。しかし、すぐに笑みを浮かべ、小さく頷く。

「……ありがとうございます。……それじゃあ、一束ください」

雲ハと暮らすようになつてから、カエテは、なるべく人間に心を開いていいと決めた。自分から殻に閉じ籠つていてはいけない。彼と同じように優しい人間は、きっと自分の身の回りにも沢山いる。

(「こんな風な考え方ができるよつになつたのも、雲ハさまのお陰……）

おばさんからネギの入った袋を受け取りながら、カエテはやつ思つた。

大分買いすぎてしまった、とカエデは心中で呟いた。重いビニール袋が体力を奪う。……そろそろ、家に帰ったほうが良いかもしない。

すぐ傍に、丁度良く小さなカフェがあった。その店内の壁に時計が掛かっている。カエデはその時計で時間を確認しようと、店内を覗き込んだ。

「……！」

その瞬間……カエデは、持っていたビニール袋をその場に落としてしまった。中に入っていた卵のパックが割れ、中身がアスファルトに流れしていく。通行人が怪訝な顔をしてそれを見つめながら次々と通り過ぎて行つた。

「……い、嫌……っ」

小さくそう呟いたカエデは、慌ててそこから駆け出した。

## 第29話 雇い主

カフェにはたくさんの人間がいた。女子高生、サラリーマン、OL……。カエデが店内を覗いた瞬間、その中で、目が合った男がいたのだ。その男の顔に、カエデは見覚えがあった。

そう、それは……、以前の雇い主。

見間違えるはずがない。絶対に、あの人だ。今までずっと、あの人 の顔を忘れたことなどなかつた。忘れないのに、忘れられなかつた。 目を瞑れば、口の端を吊り上げて笑う彼の顔が浮かんでくる。

夢の中で、自分は何度も何度も彼に殺された。実際に現実でも、酷 いことを沢山された。……あの時の雇い主がカフェに居て、あるう ことか目が合つてしまつたのだ。

「はあ、はあ、……はあ」

カエデは必死に逃げた。靴が片方飛んでいつても、誰かに肩がぶつかつても、振り返りもせずに。そんなカエデを不思議そうに見つめる小学生たちと擦れ違う。ホームレスの人たちが、首を傾げながら カエデを見ている。

「はあ……はあ、はあっ……」

カエデは人気のない雑木林の中に逃げ込んだ。それがどんなに危険な行為か、彼女にはわからなかつた。

「はあ、……はあ……」

汗を拭い、隣の大木に寄りかかる。

(「ここまで来ればもう、大丈夫……」)

大きく息を吐き出し、両目を瞑ったその時だった。

背後に何か、否、誰かの気配がした。慌てて振り返る。……が、遅かつた。

次の瞬間、側頭部に鈍い痛みを感じた。視界が霞む。真っ直ぐその場に立つていられなくなつた。頭の中の何かの機能がショートしたのかも知れない。

そのまま……カエテの意識は途絶えた。

### 第30話 一度目の監禁

カエデが目覚めたとき、辺りは暗闇に覆われていた。ひやりとした冷気が、カエデの頬を撫でて通り過ぎていく。ビリビリと体中に電流が走っているのを感じた。頭の中で作動していたどこかの回線が切ってしまったのかも知れない。とにかく、体中が酷く痛かった。ここはどこなのだろう。

「……くも、はちせ……め……」

この部屋に、彼はない。そう確信しているはずなのに、不思議と彼の名前が口から転がり出た。

暗闇にそっと片手を伸ばす。その手は冷たい空気に触れただけで、すぐ重力によつて自分の隣へ落ちてきた。

「雲八さま、」

先程よりも少し声を大きくして、雲八を呼んだ。彼からの返事は無い。

「雲八さま……」

あの優しい笑顔と声を求めて、カエデは痛みの走る体を起こそうと躍起になる。

カエデの腹部を誰かの足が蹴り上げたのは、まさにその瞬間だった。

「つあつー」

その衝撃に、悲鳴をあげて反射的に体を縮める。腹部を蹴られたこ

とによる息苦しさで何度も咳を繰り返し、思わず顔をあげてしまつたカエデは息を呑んだ。

「……」主人様……

カエデを見下ろしている、ニヤついた顔。それでもカエデにとつてその顔は、おぞましい死神のよつな顔に見えた。死神の口許が更にたりと歪められ、その唇からもう一度と聞きたくなかった耳障りな声が紡がれて、カエデの鼓膜を震わせた。

「よお、久しぶりだな。糞口ボット」

「……」

恐怖で、声が出ない。背中を床にはりつけるような格好のまま、じつと男の顔を凝視する。

「覚えてるか？俺の事。……ま、忘れてるわけがねえか。散々可愛がつてやつたもんな？」

不意に自分の目線の高さまで男の顔が近づき、カエデは更に体を強張らせた。男は張り付いたようなおかしな笑顔を浮かべたままカエデの長い髪に手を伸ばし……それを、容赦なく自分の方へ引き寄せた。頭皮と共に剥がれようとする毛髪。その痛みにカエデは必要以上に驚いてしまい、情けない悲鳴が口から漏れた。その反応が面白かったらしく、男は続いてカエデの頬にもう片方の手を伸ばし、白く柔らかいそこに鋭く爪を立てた。

「つ……！」

その痛みに顔を顰めて、昔のように思わず謝罪の言葉を言いそそうに

なったカエデだったが、それを堪えながら唇を噛み締め、男を睨みつけた。カエデのその憎しみのこもった瞳を見た男は、不機嫌そうに低い声を出して再びカエデの髪の毛を強く引いた（痛そうに顔を歪めはするものの、カエデはもう悲鳴をあげなかつたが）。

「……んだよ、その目。俺に反抗する気か？ ロボットが人間様にたてついて良いと思つてんのかよ」

カエデは強く強く唇を噛んだ。そうでもしていないと、今にも恐怖で涙が溢れ出してしまいそうだった。

「……わ、私は……つ……ロボットです、でも……私には心が、あつて……。だから、……」

言葉が、上手く口から出でこない。この男に言いたいことはそれらもう数え切れないくらいあるというのに、自分にはその全てを正確に伝えることが出来ない。その事実が、ただ悔しかつた。

恐怖心を抑えるために、男の瞳から目を逸らさない。狂気に満ちた男の瞳には、唇を噛んだままのカエデの姿が映つている。

「……はつ」

男は片手を額に持つていき、くつくつく、と喉の奥から笑い声をあげた。

「お前、あんなに俺に痛い目に遭わされておいて、まだ人間様の恐ろしさを理解できて無いわけ？ 本当頭悪いな。流石人工的に造られた頭脳だな。覚える知能なんてないわけか」

その見下した言い方と物凄く不愉快な口振りは、昔雇われていたと

きと全く変わつていない。カエデは男の瞳を睨みつけたまま、震える声で必死に抗議した。

「……も、もう私は、貴方の私物ではありません。貴方のように鬼畜な人間ばかりではないと、新しい雇い主様が教えて下さいました。どんな事をされても……人間を“恐い”なんて、に、一度と思いません！」

「震えながら何言つてんだよ、ばーか」

どうやら氣を悪くしたらしい。男は額に薄く青筋を浮かべて、カエデの脇腹を足先で蹴り上げた。メキッという音と共に、ずっと電流が流れているような感覚がしていたカエデの体が更に悲鳴を上げてスパークする。

「あ、う……っ」

脇腹を押さえ、必死に酸素を取り込みながら呼吸を繰り返す。そんな彼女を冷たく見下ろし、男は言い放った。

「お前は人間じゃねえんだ。いいか……？　この世界で一番偉いのは人間様なんだよ。良く覚えておけ」

カエデは何も言わず、涙の浮かんだ瞳で男を睨みつける。暫しの間の後、男が口の端を吊り上げて笑つた。

「お前、覚えてるよな？……俺に殺された夜。あの日俺に協力してくれたダチが、ずっとお前に会いたがつてたんだ。さつそくこれからそいつに電話してきてやるよ。わざわざ造り直されたみたいだが、残念だったな。そいつらと一緒にお前をもう一度、完全に殺してやるよ」

男は笑い声をあげながら、部屋から出て行った。  
この部屋の向こうには電気が点いているらしい。薄い明かりが一瞬  
だけ部屋の中に漏れたが、すぐに扉によつて遮断された。

### 第31話 鎖

カエデは額に脂汗を浮かべたまま、体を捻って部屋の中を見回した。相変わらず部屋は暗いまだつた。しかしカエデの瞳は大分その闇に慣れていたので、室内にあるものが何なのかは大体把握できた。

移動してみようとして、気がついた。自分の両足には硬い金属で出来た鎖が、ぎっちりと巻きつけられていたのだ。

それは足を開くこともできないようにしつかりと両足を結びつけて、離さない。いくら足首に力を入れてみても、それは解けそうに無かつた。

溜息をひとつ吐いて、カエデは鎖を解くことを諦めた。

煙草の臭いが染み付いている、カーテンの閉め切られた部屋。この部屋は昔カエデが雇われていた頃からほとんど変わっていなかつた。変わつたことといえば、本棚の位置が少し窓側にずれていることくらいだ。

嫌でもあの日のことを思い出す。あの夜、自分はここで殺されたのだ。

暗い部屋、家具や服に染み付いた煙草の臭い、数人の男たちの笑い声、電動のこきり……。

電動のこきりが、音を立てて動き始める。自分の体が、無機質な音を放つその機械によつて切り刻まれていく。細かく、もつと細かく。まるで再び死にのみこまれてしまったのかと錯覚するほど、その映像はとても鮮明にカエデの脳裏に浮かび上がり、どうしても消えてくれない。

暫くしてようやく我に返ったカエデは、慌てて首を横に振った。

だめだ、思い出してはいけない。思い出して恐怖に苛まれるよりも先に、自分にはやらなければいけないことがある。

カエデは膝を折り曲げたり伸ばしたりしながら、芋虫のように奇妙な格好でのそのそと壁から離れた。

扉の近くで、微かにあの男の笑い声がする。その笑い声を聞いた瞬間、再びカエデは恐ろしさで体が竦みあがつた。

この薄い壁を隔てた向こうに、あの男がいるのだ。奇妙な行動をしていることがバレたら最後、きっともう一度と雲八の元へは戻れない。

なるべく音を立てないように静かに行動しようとカエデは決意した。息をするのも躊躇われるようなその静寂の中で、足首に巻きつけられた鎖ががしゃりと大きな音を立てたのを聞いた。

「…」

息を潜め、扉の外の様子を確認する。男はどうやら友人と会話を熱中していて今の音に気がつかなかつたらしく、扉の外からは先程よりも若干大きくなつた彼の笑い声が聞こえただけだった。

「……」

大きく安堵の息を吐き出し、あまりの恐怖で涙目になつてしまつた目を、のろのろと後ろへ向ける。

足首に巻かれた鎖は、壁から突き出している棒状の不思議な物体に固定されていて、これ以上は進めないようになつていた。

### 第32話 携帯電話

す「」す「」と後退し、頭を抱える。こんなに行動できる範囲が少ないのに、どうやって逃げる方法を考えれば良いのだろう? 目の前に窓があるが、ここは9階なので飛び降りることも出来ない。否、鎮があるのでそれすらも行動には移せない。

(早く、考えなくちゃ……。早くしなくちゃ、私は……)

再び殺されてしまつことも、勿論怖かった。だけどそれよりも怖いのは、雲ハに嫌われてしまうこと。

雲ハは知らない。自分が何故家に帰つていなかといふことも、何故夕飯が用意されていないのかといふことも。こつして捕まつて再び破壊されたとしても、何も知らない雲ハは“カエデが出て行つてしまつて、帰つてこなくなつた”と考へることしか出来ないだろう。

そうしたら雲ハは自分のことを軽蔑視するかも知れない。考えたくはないけれど、“拾つてやつたのに、あんなに優しく扱つてやつたのに、どうして”と勝手な自分を恨むかも知れない。

あの優しい雲ハがそんな事を考へるはずはないと心の中で必死に否定してみるが、逆に自分を置いて雲ハがいなくなつたときの事を想像してみたら、彼に対し怒りの言葉しか出て来なくなることを知つてしまつた。

ああ、許せない。あの男から逃げ切れなかつた自分が、記憶の中の優しい雲ハを想像で汚してしまつ自分が、許せない。

自己嫌悪に陥つたカエデは両手を床に置いて、その両手をただひたすらがむしゃらに動かした。何か見つけなければ。この部屋から脱

出できるような何かを。

部屋の中は案外綺麗だったので、全く物音はしなかった。しかし更に激しく両手を動かしたその瞬間片手が何かふにやりとしたものに触れ、それが指に引っかかつて少し動いたとき、ガチャガチャと不可思議な音が聞こえたのが分かつた。手探りでなるべく音を立てないようにそれを自分の元へと引き寄せたカエデは、ぎょっとして目を見開いた。

「……これは……」

それはどうやらガラス製の、割れた写真立てのようだつた。粉々になつた破片が、無造作にビニール袋に入れられている。そのビニール袋の中には破片に混じり一枚の写真が入つていた。カエデはそれを袋の中から拾い上げ、その顔を見て驚いた。

その写真には、幸せそうな笑顔を浮かべて肩を並べている、今カエデを監禁している男と以前自分の黒い瞳を奪つた女が写つていた。この2人は、以前自分が雇われていた頃は恋人同士だつた。今もそうなのだろうか？しかし、どうしてそんな大切な写真を破片と共に袋に入れてしまつているのだろう。

その疑問で何となくもやもやした気分のまま、再びビニール袋に目を向ける。先程は気がつかなかつたが、ビニール袋にはまだ何か大きな塊が入つているようだつた。そつとビニール袋に手を入れて、破片で指を切らないように注意しながらその塊を取り出してみる。それは携帯電話だつた。雲ハガ持つてゐるものよりも少し分厚く、沢山の傷が入つてゐる携帯電話だ。その裏側には、先程の写真に写つてゐるのと同じ男と女が写つた小さなシール状の写真が貼られてゐる。

カエデはその携帯電話を開いて、電源ボタンを押してみた。あまりこういつたものの使い方は良く分からなかつたが、何度か雲ハガ操作しているのを見ていたので、見よう見まねだつた。あまり期待は

していなかつたのだが、電源が点いたようだ。マナーモードに設定してあるのか、音は鳴らない。深い暗闇だつた室内に、突然の明るい光が浮かび上がつた。

その明るさに驚き、カエデは少しづつ片目を瞑つたり開いたりしながら徐々に目を光に慣らしていった。少しづつ目が慣れてきたはいいものの、使い方はやはりさっぱりわからない。勿論カエデは雲ハの携帯電話の番号を知らなかつた。それどころか、自宅の電話番号すら覚えていない。

これは恐らく役に立たないだろう。そう判断して電源を切ろうとした時、カエデはふとある部分に目を留めた。携帯電話の侧面、小さなボタンのようなものがいくつか付いているそこに、不思議な赤黒い色をした何かが付着していたのだ。爪の先で擦つてみたらそれはすぐに取れて、カエデの白い指にはりついた。

(この色は……？)

氣のせいかも知れないが、この色は自分が良く知つてゐる色のよくな気がした。殺されたあの夜、自分の体から大量に出たあの液体の色に非常に良く似ているような気がしたのだ。

嫌な予感がして、思わずカエデはメールメニューを開いていた。受信ボックスを開き、メインフォルダをクリックする。……表示されているほとんどの名前は、“朱音”だった。恐らくこれは、写真やプリクラに写つていたあの女性……もとい、あの男の彼女の名前なのだろう。最後にメールが送られて來ていたのは、今から2週間前だつた。それから先、この携帯電話には1通のメールも來ていない。慣れない手つきでボタンを押して、恐る恐るメールの内容を見てみる。

『大事な話があるんだけど、メールじゃ話せないので。明日の夜7時頃に公園で会える?』

顔文字も絵文字も全く使われていない、飾り気のない文章。その文章を読んだとき、何故だろう、酷い吐き気が込み上げてきた。ただ、とんでもなくおぞましいものを見てしまったのだと感じた。

もうやめよう、電源を切ろう。そう思っているのに、指先は止まつてくれない。いつの間にかカエデは、データフォルダから写真や動画の記録を引っ張り出していた。

フォトフォルダには数年前からの写真が保存されていて、そのほとんどがあの男とその彼女の写真だった。数枚、翼&朱音、などと可愛らしいロゴが入っている。2人は本当に幸せそうな笑顔を浮かべていて、とても仲が良さそうだった。暫くそんな写真ばかりが続々、つい2週間前に撮られた写真が保存してあるフォルダを見た瞬間、指が止まった。

何だか、開くのが怖かった。開いて平氣だらうかと、好奇心と恐怖心が入り混じつた不思議な感情が体中を駆け巡る。

このフォルダも先程のメールメニューと同じ様に、2週間前以降の記録は全く無い。まるでこの携帯電話だけ2週間前から時が止まっているかのようだ。

それから何度も携帯電話を床に降ろそつかと迷った挙句、カエデは意を決してそのフォルダを開いた。……開いてしまった。

その瞬間、カエデは小さな声で悲鳴をあげて、思わず携帯電話を床に投げ捨てた。床と携帯電話がぶつかって、かしゃりと鈍い音が鳴る。

両手で口を押さえ、震える体を落ち着かせるために肩で何度も大きく息をした。鳥肌が全身を覆っているのを感じながら、恐る恐る再び携帯電話に近づいて画面を覗き込み、耐え切れず目を逸らす。

保存されていたその写真に写っていたのは、変わり果てた、彼の彼女の姿だった。腹から大量の血を流し、両目を見開いて地面に仰向けに転がされている女性。酷く髪型が乱れ服が血で真っ赤に染まつ

てしまつてゐるが、これは間違いなくあの朱音という女人だ。いつたいどうしてこんな写真が保存されているのだろう。その日撮られた写真は、すべてが朱音の遺体の写真ばかりだった。

### 第33話 試写会

呆然と画面に目を落とすカエデの姿が、目の前にある姿鏡に映し出されている。自分のその青白い顔に何となく視線を動かしたその時だった。……鏡に映つていてる自分の背後に、おぞましい笑みを浮かべた男の姿が浮かび上がったのは。

振り返ることすらできない内に、カエデの髪の毛は強い力で驚掴みにされ、思い切り後ろに引っ張られた。

「きやああああ！」

大声を上げてみても、その力は一向に緩まない。それどころか更に強くなつていてる氣さえする。カエデの頭は強かに床に叩きつけられた。外側と内側からの激痛で、眩暈がする。頭皮から抜けてしまった数本の髪の毛が自分の頬にはりついた。

「何度も教えたから分かるんだ？　ああ？　大声出すと、今すぐここで殺すぞ……」

男の低い声がカエデにそう囁き、脇腹に容赦のない足蹴りが入る。両足ががくがくと震え、その僅かな振動で鎖が細かく震えて音を立てた。

指輪の嵌められた大きな男の手が、カエデのすぐ脇に転がっている携帯電話を拾い上げた。携帯電話を開いて、先程表示されていたままの画面を見た男は、へえ、と呟いて愉しそうに片眉をあげた。

「見たのか」

その問いに対しても、カエデは震えながら首を横に振る。恐怖で喉が

引き攣り、息が出来なくなつた。

「本物の人間の死体だぜ。……つゝとりするだろ?」

男は低く笑い声をあげながら、これ見よがしに携帯電話をカエデの目の前に突き出した。

「……よお、お前の中に流れてる偽物の血は、これがモーテルなんだぜ? “本物”を見て、ロボットのお前はどう思つたんだ? 詳しく聞かせてくれよ」

男はにやにやと笑つてそう言つたが、カエデは何も言わず唇を引き結んでいた。そんなカエデを見て、男は突然顔を輝かせて膝を打つた。

「おお、そうだ。そんじやあ、お前にいいもん見せてやるよ。ちょっと待つてる」

嬉々とした表情で、男は部屋を出て行く。カエデはただ両目を見開いた状態でそこにおとなしく転がされていた。転がっているしかなかつた。

昔あの男に“雇われていた”頃。あの頃も、あの男は何度か自分ところにいいものを見せてやる、と言つてどんでもないものを持ってきた。それは酷く硬い鞭だつたり色々なものを瞬時に溶かしてしまう液体だつたり鋭利な刃物だつたり……とにかく、どんでもないものだつた。

言葉では言い表せないほどの恐怖心。カエデの瞳のふちにはいつの間にか涙が溜まっていた。

数分後、男が部屋に戻ってきた。男が大事そうに抱えているのは、

ビデオカメラのよつなものだつた。男は鼻歌を歌いながらビデオカメラをテレビに接続し、こちらを振り返つて言つた。

「“つい最近”、撮つたんだ。お前はどうせ今夜にでも俺らに殺されるんだし、特別に見せてやるよ。それじゃ、じゃあいい。……04号さん」

男は不気味に笑いながら部屋を出て行つてしまつた。恐怖で体が動かない。男が居なくなつたのは自分の田で見ていて分かつているのに、まだ体中の筋肉が緊張していた。

ただ一人部屋に取り残されたカエテの田の前で、テレビが映像を映し始める。ひつそりと恐怖の試写会は始まつてしまつた。

## 第34話 映像

電源は点いている筈なのに、何故かまだ画面は闇に包まれていた。故障しているのだろうか、そう考えたカエデは一瞬だけ肩の力を抜いた。しかし、見つめている画面が大きく揺れた気がして、カエデは再び体を強張らせる。じつと画面を見つめているうちに、微かな衣擦れの音と地面を靴で踏む小さな音が耳に入り、カエデは理解した。

この映像は、酷く暗いところで撮影されたようだ。この部屋と同じくらい暗いところか、もしかしたらここよりもっと暗いところで。画面が進む（よく分からぬが、砂利を踏むような音が聞こえるので、恐らく前進しているのだろう）。大きな木や木製のベンチやブランコが闇に溶け込んで、ぼんやり映りこんでいるのがなんとなく分かった。きっとこの映像が撮影されたのは、どこかの公園だろう。少なくとも、屋外だということは確かだ。

やがて、砂利を踏みつける音が消えて画面が揺れるのをやめた。カメラが前を向く。遠くの方に、向かい合つて立つている2つの人影が映し出された。そこだけ街頭で照らされていて、何とか2人の姿を見分けることが出来る。……男性と、少し小柄な女性のようだつた。何か言い合っているように見えるが、こちらに声は聞こえない。

「死ね！」

突然こちらに聞こえる程大きな男の罵声が飛び、次の瞬間、男性が女性の腹を勢い良く蹴りつけた。

女性が悲鳴をあげて地面に倒れ込む。相当強い力で蹴られたのだろう、腹を抱えてのた打ち回つていいようだ。男性はそのまま女性に馬乗りになり、男性の拳が女性の顔を打つた。数えることも出来ないくらいに素早く、何発も何発も。

「うるせえんだよ！ 騒ぐと殺すぞ！」

男性の罵声に、女性の悲鳴が呑み込まれる。女性は泣いていよいよだ。しきりに田元の辺りを指で擦つている。男性は女性が静かになつたのを確認するよう何度も女性の胸倉を掴んで激しく揺さぶつた後、こちらの方に向かつて片手をあげた。

画面がそちらに向かつて動き出す。カメラを見た血まみれの女性の顔が、懐中電灯で照らされた。画面の左端と右端から体格のいい男が2人飛び出した。女性は今、計4人の人間に囲まれているような図になつているらしかった。

「あやあー、何なのよあんたたち！ ちょっと翼、どうにつけと？」

涙声でそう叫んでいる女の顔には、勿論見覚えがあつた。

「いや！ やめて翼！ お願ひだから……」  
「うるせーつづけんだろ。黙れよ」

ポケットに手を入れた男性が冷たい声でそう言い放ち、再び女性の腹部を蹴りつける。鈍い音がして、女性は声にならない叫び声をあげた。

「お前らもやつちまえ。こいつはもう要らねえ

男性はそう言いながらまたしても女性の顔を片足で踏みつけた。泥のついた靴で踏まれた彼女の顔は赤黒く変色し、女性は泣き喫ながら地面に倒れて苦しんでいる。

「ここのかよ？」

カメラを持っている人物が、くぐもった声で尋ねた。声の低さからして、恐らくこの人物も男性なのだろう。田の前にいる男は、ああ、と小さく返事を返した。

「いいぜ。好きなだけ殴るなり蹴るなりしてやれよ」

その言葉を聞いた他の男たちの拳が、女性の顔を殴りつけた。その度に女性は大きく悲鳴をあげ、涙声で叫ぶ。

「おい、いいのかよ翼。彼女さん、死んじゃうぜ？」

「いいつつてんだろ。大体もう彼女じゃねーし」

「そうか。そんじゃ、遠慮なく……」

肉を蹴りつける音。悲鳴。數十分もの間、それは絶え間なく続いた。殴られすぎて女性の顔は酷く歪んでしまっている。女性が縮るようになに男性の足を掴み、血でぐもつた声で叫んだ。

「やだあ、やめて！ 苦しいよ、翼……っ」

男性は足を振るつて女性の手を跳ね除けたと、背中を片足で踏みながら、は？ と冷たい声を上げる。

「黙れ。俺の名前を気安く呼ぶんじゃないよ。もう俺はお前の男じやねえんだろ？ ほら、その惚れた男つてヤツに助けでも求めてみろよ」

「…………めん……。翼のことが、嫌いになつた、わけじゃ……な、いの。だけど……」

「いつからそいつと付き合つてたんだよ。ガキが出来るつて事は、相当前からなんだろ？ 正直に答えるよ、そうしないと……」

「し、知り合ったのは、半年くらい前……」

「へえ……。半年前ってことは、俺一筋とかほざいてやがった時からって事だよな？ そんな前からこの俺に一股かけてやがったわけ？」

男性は女性を暫しの間冷たく見下ろしていたが、やがて突然満足したような笑みを浮かべて、ジャケットからサバイバルナイフを取り出した。

「じゃ、死ぬ死ぬよ

「え……っ

女性の顔から血の気が失われていく。周りの男たちも流石に焦ったような顔をして、男性を止めた。

「あ、おー。翼、それはやべえよ。落ち着けって。……な？」

男性はまわりと皿を輝かせて、何故か口許に笑みを浮かべたまま首を傾げる。

「今更何言つてんだよ。どうせこのまま生かしても、俺らは刑務所行きだぜ？」

その言葉を聞いた女性は、大きく首を横に振つて唾を飛ばしながら叫んだ。

「いや！ いやよ、お願ひ！ やめて、殺さないで！ 言わないから、あたし、誰にも言わないから！ だからお願ひ、命だけは助けて！」

「心配すんなって。ちゃんと胎のガキ共々殺してやるから

「やめて……いや……助けて！ 誰か助けてーー！」

「おい、何度も言つてるよな？ ……黙れって」

女性が一際大きな悲鳴をあげたその瞬間、サバイバルナイフが、女性の腹に向かつて一直線に振り下ろされた。

### 第35話 救いの手

カエデは画面から目を逸らしていた。映像はいつの間にか終了したようで、再び画面に目を向けた時にはもう暗闇しか映つていなかつた。

暫くの間放心状態だつたカエデだが、ようやくハッとして顔をあげた。それと同時に、体が小刻みに震え出す。

逃げなければ。

ここに監禁されてからずっとその思いはあつたが、今の映像を見て更にカエデの思いは明確なものとなつた。早くここから逃げないと、確実に殺される！

自分は油断していたのだ。心のどこかでは“流石に、すぐ殺されはしないだろう”と甘く考えていた。しかしそれは違う。自分の彼女だつた人間まで躊躇いなく殺す人なのだ。ロボット機械である自分なんて、すぐ壊されてしまうだろう。

カエデは自分の足にとりつけられている鎖を外そと、両手の関節が白くなるほど力を入れてみた。しかし、僅かに指の先が赤くなつただけで鎖はびくともしない。

焦つてはいけない。焦ると冷静な判断ができなくなる。いくらそう考へても、焦る気持ちは膨らむ一方だつた。

自分はまたここで殺されるのかも知れない。以前よりもっと苦しく、激しく、辛い方法で……。もう2度と蘇る事のできないように、頭部も破壊されるかも知れない。そうなつたら、自分はもう2度との世界を生きることはできないのだ。

突然、カエデの脳裏に雲八の笑顔が浮かんだ。その笑顔を思い出した途端、不思議と全身の力が抜けていった。

つい最近までは、この世界が、人間が、人間に造られた自分が、許せなかつた。大嫌いで憎むべき存在だつた。しかし今の自分はどうだろう。たつたひとり、彼の笑顔を思い出しただけでこんなにも涙が溢れ苦しくなる。

この世界を愛することができるようになつたのは……、楽しい、嬉しいという感情を思い出すことができたのは……、すべてあの人のおかげなのだ。

「雲八様……」

涙を流しながら、カエデはぽつりと雲八の名を呼んでみた。脳裏に浮かぶ雲八が、笑顔でこちらを振り返る。

実際に目の前に広がるのは、深い暗闇と煙草の臭いだけ……。

（私は、もつと生きたい。この世界で、貴方と共に……）

両手で顔を覆い、再び雲八の名を呟こうとしたその時。頭上で、こつんこつん、と何かを叩くような不思議な音がした。

驚いて、思わず顔をあげる。天井のすぐ近くの位置にぽつんと小さな窓があることに、カエデはこの時初めて気づいた。慌てて窓に手を伸ばしてみると、閉じられていた厚いカーテンを引くと陽の光が差し込んできて、一気に室内が明るくなつた。

やつと光に目が慣れてきて、恐る恐る片目を開いてみると、その窓の向こうには見覚えのある色をした鳥がいた。そう、言つまでも無くその鳥は、カエデが雲八の家で可愛がっていた美しい羽を持つあの鳥だったのだ。

「…」

窓を開けようとしたが、窓は壁に嵌め込まれているつくりのもので、鍵はついていなかった。数分迷った後、カエデは唇を引き結んだ。

鍵が無いのなら、壊すしかないだろ？

そばにあつたテーブルの上から分厚い雑誌を掴んだカエデは、それを両手で持ち直して窓に近づいた。きっと大きな音がするだろう。気づかれてしまう可能性は高い。だけど、今思いつく限り、この方法以外に脱出することは不可能だ。

カエデは覚悟を決めた。一度大きく窓から離れ……、両手を勢い良く前に突き出す。一度目。がつん、と音がしたが窓は割れない。2度目。先程より少し力を強めて窓を叩く。まだ割れない。3度目。思い切りちからいっぱい窓に雑誌を叩き付けた。

ぱりん、という乾いた音がして、窓にヒビが入った。覚悟はしていたが予想以上に響いたその音に、カエデは体を強張らせて扉に視線を投げる。

……男が異変に気づいた様子は、無い。

カエデはすぐさま雑誌を床に置いて、割れている部分を両手の親指で押した。指の先が傷付き、血が滲む。それでも尚力を強めて押し込むと、ヒビの入っていた部分だけ綺麗に割れて外へ落ちていった。ほつとした瞬間、鳥がたつた今開けた窓の穴へと一直線に突進してきた。器用に穴を通り抜けて、部屋の中へ入ってくる。

鳥はぱたぱたとカエデの周りを飛び回ると、やがて彼女の目の前へおりてきた。首を傾げるような仕草をしながらカエデを見つめる鳥の目は、とても澄んでいて美しい。カエデは、そっと鳥のそばへ屈んだ。

「私を心配して探しにきて下さったんですか？」

鳥は無論何も答えない。しかし、そのつぶらな瞳に自分の顔が映つ

ているのを見た時、カエデは微笑を浮かべていた。

「実は、私は囚われてしまったのです。もう一度と雲ハさまの元へ帰る事はできないかもしません」

心なしか少し悲しげな声で鳴く鳥。カエデはそつと人差し指を伸ばし、鳥の頭を優しく撫でる。

「……でも、私は諦めたくない。だから鳥さん、お願ひします……  
私に協力してください」

カエデは、先程窓を割る時に使った雑誌を拾い上げてページをめくつた。

その中から白っぽい1ページを選んで破り、あらかじめ床から拾つておいた鉛筆で文字を書く。

「これを雲ハさまに届けて頂けませんか？」

カエデはその紙を四つ折りにして、鳥の目の前に差し出した。鳥は丸い瞳でじっとカエデと紙を見つめている。  
やはり無理なのだろうか。カエデがまた泣き出しそうになつた、その時。

突然鳥がその紙を口にくわえ、飛び始めたのだ。

「……鳥さん！」

鳥は何度かカエデの頭上を飛び回ると、開け放たれた窓から遙か空の彼方へと消えていった。

カエデは暫くその姿を見送った後、鳥が雲ハの元へ辿り着くことを

祈つて、先程と同じ様にカーテンを閉めた。

## 第36話 帰宅

「ただいまー」

帰宅した雲八は自室の前で小さく呟いた。鍵を開けて玄関に入る。部屋の中は真っ暗だった。

(無理もないか……)

もひ日付が変わってしまっているのだから。

こんな時間に部屋に戻るのは久しぶりのことだった。今日も真っ直ぐ家に帰るつもりで居たのだが、マンションへ帰る途中モ力含む昔の同級生たちに会い、成り行きで一緒に飲みに行くことになってしまったのだ。連絡を入れておこうかとも考えたのだがあいにく携帯電話の電池が切れていたため、カエデには何も伝えていない。

(俺、最低だな……やつぱり断るべきだった)

カエデのはにかんだ笑顔を思い出す度に胸が痛くなる。

(待つてたかな、カエデ……)

でも、まだ良かつた。寝ないで自分を待つてくれていたりしたら、罪悪感で死になくなつただろう。電気が消えているということは、きっとカエデは就寝しているはずだ。

「……あれ?」

リビングの電気を点けた雲ハは、思わず声を洩らした。食事の時に雲ハが居なければ、いつもカエデはリビングのテーブルの上に食事を用意しておいてくれるのだが、今日は何も用意されていなかつたのだ。

雲ハは首の後ろを搔いて、ふう、と息を吐いた。

（愛想尽かされちゃつたのかな？　しようがない、自分で入れよう）

流石に連絡もよこせない雇い主にはウンザリするだろう。これはきっと、彼女なりの不満の表し方なのだ。

台所に移動して、茶碗を用意して炊飯器のふたを開ける。

「……ん？」

雲ハは目を丸くして炊飯器の中を覗き込んだ。……炊飯器の中は空っぽだつた。

洗つたままのような状態で放置されている炊飯器。よく見ると、フライパンや鍋なども食器棚の中にきちんとしまわれている。カエデの茶碗などの食器も、食器棚の中にしまわれていた。

「おかしいな……」

いつもカエデは食事を終えて皿を洗つた後、自然乾燥させるために流しの傍の入れ物に入れておくはずなのだが。

「……」

なんだか嫌な予感がした。雲ハはそっと茶碗を食器棚の中に戻すと、

カエデの部屋へ向かつた。

ロボットとはいえ一応高校生設定の女の子の部屋だから、雲八はこの部屋には必要最低限入らないようにしようと決めていた。  
：就寝中となれば、尚更だ。しかし、何故か今はどうしてもカエデの様子を見なければいけない、そんな気がしてならなかつた。  
ノックをしてみた。しかし、返事は無い。

「カエデ、『ごめん。……入るよ?』」

一応そう断つておいてから、ドアノブを回す。

部屋の中へ入り、布団の方に手をやる。何となく布団が膨らんでい  
るような気がして、雲八はほっと安堵の息を吐いた。

(なんだ、良かつた。いるのか……。まあ、とりあえず家に帰つた  
ことは言っておかなくちゃな)

そう思いながら電気を点けてベッドへ近寄つた雲八は絶句した。布  
団の中には、少し前に雲八がUFOキャッチャーでとつてきたキヤ  
ラクターのぬいぐるみが入つていたのだ。無論、布団が膨らんでい  
たのはそれのせいで、肝心のカエデの姿はどこにも見えない。

「カエデ……？」

布団を引き剥がしてみても、ベッドの下を覗き込んでみても、やは  
り居ない。

「カエデ！ カエデ！」

もつ深夜だとこゝのに、思わず雲ハは彼女の名を呟んでいた。

### 第37話 手紙

部屋の中をくまなく探す。

情けないことだが、カエデが行きそうな場所など思い当たらなかつたのだ。

せいぜい行くとしても、家の周りの店や公園……。こんな夜遅くまで、そんなところにいるはずもない。

トイレ、風呂場、玄関、浴室、カエデの部屋、部屋中を見回して、クローゼットを開けて、テーブルの下まで覗き込む。……どこにも居ない。

「どうに行つちまつたんだよ……」

警察に連絡することなんてできない。彼女は人間ではないのだから、まともに取り合ってくれないだろう。

だからと書いて、どうやって彼女を見つければいいのだろう?

雲八はよろめきながら、再び台所へ向かつた。

流し台を覗き込んでみたり、食器棚を開いてみたりした。そんなところにカエデがいるはずは無いと分かつていて。ただ、何か手がかりになるものが欲しかつた。

窓を開けると、少し冷たい夜風が室内にふきこんできた。途方に暮れながら、星の出ている夜空をぼんやりと見上げる。目の前に見えている電線。……そこに、見覚えのある鳥が舞い降りてきた。

「……あー。」

カエデが可愛がっていたあの鳥だ。あんなに珍しい色をしたあの鳥を見間違えるはずがない。よく手を凝らしてみると、くちばしに向かを挟んでいたように見える。

雲ハは咄嗟に窓から身を乗り出して、鳥の方へと手を伸ばしていた。その鳥は一度だけ高く高く舞い上ると、窓から伸ばした雲ハの手の上へ、くわえていたものを落とした。慌ててそれを掴む。その様子を確認した鳥は、再び漆黒の空へと消えていつてしまった。

鳥の消えていった方を気にしながらも、雲ハはその紙を見つめた。四つ折にされている、白い紙だ。手紙か何かだろうか？

それを開いた雲ハは絶句した。そこには、次のようなことが書かれていたのだ。

『雲ハさまどうかおたすけください。以前のやといぬしさまことらわれてしましました。彼は今夜部屋にお仲間をまねいてわたくしのことを再び再起ふのうに追い込むつもりです。にげだしたいのですが足かせがありにげられません。ここはマンションの9階です。近くにこうえんとゆうびんきょく、それからぎんこうとえきがあります。以前のやといぬしさまのお名前は、西城翼さまです。』

「……これは……」

差出人の名前はどこにも書かれていたが、たどたどしいその文章を読んだ雲ハは、これを書いたのは絶対にカエデだろうと考えた。

「……カエデ、」

カエデの名前を呟いた雲ハは、ハツとして立ち上がった。これが本当ならば、カエデが危ない。

雲ハは慌てて靴を履き、玄関を飛び出した。施錠していないうちに構つていられなかつた。カエデがさらわれたのだ。しかも、以前の雇い主といえどもカエデを人間不信にした張本人だ。怒りと辛さと殺意が入り混じつたような不思議な感情が雲ハの心の中を支配する。息苦しくなつて、鼓動がやけに速くなつたのを感じた。今までこんなに走つたことはないと本気で思うくらい、全身を走ることに集中させる。一刻も早くカエデの元へ行かなければ。

急ぎすぎて何度も転びそうになりながら階段を駆け下りて、道路に出る。一瞬だけどの方向に進もうかと足を止めたが、すぐに前方に向かつて再び駆け出した。

(公園、郵便局、銀行、駅が近くにあるマンションなんか、近くにあつたか……?)

まだ上京してきて間もない雲ハは、この辺りの地形すらよく頭に入つていなかつた。

(でも、駅や郵便局や銀行が近くにあるマンションってこの辺では好条件だよな……。高級マンションなのか?)

頭ではぐるぐる色々な考えを巡らせながらも、走るスピードは落とさない。こんなに全力で走るのは一体何年ぶりだろうか。小学生の時リレーの選手になつた時だって、こんなに力一杯走りはしなかつた。

走りながら腕時計に目をやり、雲ハは唇を噛み締める。もう時刻は

深夜の1時を回っていた。手紙には、今夜以前の雇い主が仲間を連れてくれると書いてあつた。もしかすると、もう手遅れかも知れない。

「……つ馬鹿、何、考えてんだ、俺！」

息絶え絶えにそう叫び、雲八は更にスピードをあげて夜の道路を駆けた。そんなことを考へてゐる時間が勿体無い。諦めるわけにはいかないのだ。

毎日大学へ向かう道で通るスーパー、自分は入ったことは無いが、モ力たちがよく行くと話していいたお洒落なカフェ。どちらも、当たり前だがシャッターが閉まり店内は真っ暗だつた。昼間は賑わつてゐるなんてとても信じられない程に静まり返つたその場所は、異様な不気味さを醸し出している。

カフェの傍にある小さな小道を通りうとした雲八は、足元に何かが落ちてゐることに気がついた。

「？」

その物体が妙に氣になつた雲八は思わず足を止めてしゃがみ込み、目を凝らしながらそれを拾い上げた。それは先程通つたスーパーの買い物袋だつた。大学へ行く途中で買い物をする事があるので、このマークには見覚えがある。

何気なく袋をひっくり返してみて、底に穴が開いていることを知つた雲八は、ようやく周りに落ちてゐるものに氣が付いた。林檎やジヤガイモらしきものの残骸が散乱してゐる。生ゴミというよりは、何者かに食い散らかされたような感じだつた。きっと野良犬や野良猫、或いはカラスがこれを漁つて食べたのだろう。

しゃがみ込んだ雲八の足元には卵のパックが落ちていた。殻が中に入つたままになつていて、そのほとんどは割れてしまつてゐる。雲八は卵のパックを持ち上げて、地面に流れてゐる乾ききつた卵の

痕を目で辿った。その向こうに、四角形の塊。それを暫くじっと見つめた雲ハは、はつとした。

(間違いない、これ、カエデの……)

そう、それはカエデの財布だったのだ。雲ハがカエデに買ったものだから、見間違えるはずはない。

開いて中身を確認し、中に入っている札や小銭を調べる。普段と変わりなくお金は入っていた。手つかずのままここに放置されているということは、引ったくりに盗られたわけではない。

つまり、この辺りでカエデの身に何か起こったのだ。カエデはこの近くにいるのかも知れない。雲ハは一度その財布を両手で握り締めた後、そつとポケットにしまって、再び全速力で走り出した。

### 第39話 目的地

その後雑木林を駆け抜け、雲ハはまた足を止めた。小さな交番を見つけたのだ。このまま適当に探し回るより、ここで道を尋ねた方が賢い選択だらう。

（確かに大抵の交番は24時間体制だつたと思ひけど……）

走り回つたせいで足がやけに重い。夜の冷たい空気を吸い込んだら、少し咳き込んでしまつた。

咳が治まるのを待つてから交番に近づいてみる。明かりが灯つているので、誰かいるのだろう。

「あの……、すみません」

「……あ。はい？」

室内で欠伸を噛み殺していた白髪混じりの警官が、雲ハの声に気づいて慌てて立ち上がつた。

「どうかしたのかい？」

雲ハは足を引きずるようにしてしながら警官に近づき、掠れた声でこう尋ねた。

「ここの近くに、駅、郵便局、公園、銀行が近くにあるマンションって……ありますかね？」

「駅、郵便局、公園、銀行が近くにあるマンションへ。」

警官は雲八の台詞を繰り返してから、つーん、と顎に手を掛けた。

「あるにはあるけど、確かそこはもう入居者が全員決まっちゃつてるって話だからやめた方がいいと思つけどねえ。高級マンションだから家賃も高いよ?」

警官はびりやーり、雲八が住むマンションを探しに来た人間だと思つたらしい。流石に雲八は苛立ちを隠せず、目の前にあつた机を両手で強く叩いて叫んだ。

「いいから教えてください! お願いですから、なるべく分かり易く簡潔に!」

語氣を強めて警官にじり寄ると、警官は少し首をすくめるような恰好をしながら雲八の後ろの方向を指差した。

「ー、この道を真っ直ぐ進んだところにあるマンションだと御づよ。それはそうと、君、いい大人なんだからこんな夜中にそんな大声出すものじゃない。マナーというものを持つても考えて行動するのが大人つていうもので……」

「…………どうも」

雲八は説教を始めた警官に小さく頭を下げるが、足早に交番を出た。目の前に伸びる歩道を、一心不乱に走る。流石に東京のど真ん中なのでこんな夜中でも車通りは多く、所々に明かりがついていた。そのお陰で唯一の目印である公園、銀行、郵便局、駅を見逃さずに済んだ。300メートル程前方に大きなマンションが見える。

(きっとあのマンションだな。表札を見て西城つてやつの部屋を捜せば、後は簡単だ)

疲労で走ることに限界を感じていたが、マンションを確認した瞬間自然に雲八の足は更にスピードをあげて走り出した。

苦しくて今にも倒れてしまいそうな程心臓が脈打っているのを感じるが、ぐんぐんスピードはあがっていく。最高速で駆ける雲八の瞳は、しっかりとマンションを見据えていた。……マンションまで、あと一〇〇メートル。

## 第40話 足止め

その頃、カエデは依然暗いままの部屋の隅でじつと丸まっていた。少し離れたところに翼含む数人の男たちが座り込んで、煙草をふかしながら雑談している。

「それにしても翼、良くあいつ見つけ出したなあ」

男のひとりが部屋の隅に視線を向け、震えているカエデを見て笑い声をあげた。翼はふふんと鼻を鳴らして煙草の煙を吐き出し、だろ？ と得意気に胸を張った。

「たまたま暇だったからカフェで時間潰してたら、外から店内覗き込んでるこいつが目に入つてさあ。雑木林に追い込んでお持ち帰りしたわけよ。これってやっぱ運命つてやつ？」

「へえ。でも、またこいつの顔見れるとは思わなかつたよなー」「だよな。もう壊れちまつたのかと思ってたけど、案外アンドロイドって丈夫にできてんだな」

楽しそうな笑い声をあげる男たちを気持ち悪そうに見つめながら、カエデは唇を噛んだ。

……あの手紙は無事に雲八の元へ届いただろ？

今の自分には待つことしか出来ない。迷惑ばかりかけている自分に心底嫌気が差した。

「ところで、ハジメはまだこねえのか？」

男のひとりが不愉快そうな声をあげて大袈裟に溜息を吐いた。その名前を聞いた他のメンバーも、そうだそうだと日々に言い合つ。ハジメ、という名前にはカエデにも聞き覚えがあった。昔ここで“殺された”時、一番楽しそうに解体作業に参加していた男の名だ。

「あいつのせいで俺らはお預けくらつてんのによー」

「もつとつぐくに集合時間過ぎてんじやんか」

ぶちぶちと文句を言い始める男たち。翼はもつ一度煙草の煙を吐き出しつから、立ち上がってこいつ罵つた。

「まあ、お前らそつ慌てんなつて。もつ1回連絡入れてみる」

数分後、携帯を片手に部屋へ戻ってきた翼の顔は明らかに不機嫌そうだった。

「どうだつた？ 翼」

「……留守電設定になつてた」

「留守電？」

「ああ。今日から彼女と旅行行くつて」

「はあ？」

あちこちから不満の声があがる。この場には居ない、ハジメという男に対しての暴言が飛び交つた。

カエデは丸まつたまま全身を強く抱きしめていた。今にも発狂しそうなほどの恐怖心がカエデの精神を押し潰していく。

## 第41話 恐怖

数分後、ようやく怒りが治まつたらしい男たちは、とうとう立ち上がりてカエデの方へ視線を向けた。

「それじゃ、始めるか」

「楽しみだな」

「今回は何で殺る?」

カエデはじつとして黙っていた。あまりの恐怖でおかしくなつてしまつたのか、体はもう震えていなかつた。

男たちが不愉快な笑みを向けながら、ゆっくりとカエデの方に近づいてくる。カエデは更に体を小さく丸めた。さて、と翼がカエデのすぐ側で腕組みをした。何かを考え込むように唸つた後、口を開く。

「電動のこぎりは、深夜だから今回は使えねえな。マンションだし、隣人から苦情がきても困る」

「それじゃ、どうするんだ?」

「違うもの使ってバラバラにするか。台所には包丁があるし、そこ

の引き出しにハサミとカッターがあつたはずだ」

翼の指示を聞いて、1人の男がそれらの凶器を取りに向かつていつた。カエデの脳裏に、鋭利な刃物のシルエットが浮かんでは消えていく。

「他には? 流石にバラバラにするだけじゃ面白くないだろ」

「そうだな……それじゃあ熱湯でもかけるか」

「オッケー。おーい、コウヤ！ 湯、沸かしてくれ」

「了解」

先程台所へ包丁を取りに向かった男が、数本の包丁を他の男に手渡しながら返事を返した。

「湯が沸いたら作戦決行な」

「おう」

カエデの体が再び震えだした。全身の血が冷えて固まつていく音がする。カエデは無意識のうちに両手を強く胸の前で握り合わせていた。

お湯が沸いたとき、それが自分が破壊されるときなのだ。

翼がどこからか黒い布と猿轡を持ってきた。それを目にしたカエデの両目が、大きく見開かれる。これが何に使われるものなのか、自分には分かっているのだ。

「いや！　いやああああ！」

「…………うるせえ。ちょっと黙れ」

頬を力一杯拳で殴られた。歯に当たった口の中の皮膚が切れ、唇の端から血が流れしていく。

黒い布はあつという間にカエデのオッドアイを覆い隠した。視界が暗い闇に支配される、言葉にならない恐怖。カエデは猿轡が口に嵌められた時、このまま気絶してしまえることができたら、と強く思った。

## 第42話 真夜中の訪問者

「湯、沸いたぞー」

台所の方で男の声がした。その言葉を聞いた瞬間、カエデは一瞬心臓が止まつたかと思った。自分が再び殺される時が、遂に来たのだ。

「それじゃ、殺るか

「おうー！」

カエデは必死に鎖で拘束された手足をばたつかせて叫び声をあげた。口を封じられているせいで、くぐもった声しか出てこない。

会話とこちらに近づいてくる足音、そして空気を伝わる微かな熱で、熱湯の入ったヤカンが確実に自分の方へ運ばれていることを感じる。大粒の涙が両目から溢れ出したが、涙は視界を遮っている黒い布に吸い込まれて染みこんでいった。

流れた涙は視界を遮っている黒い布に吸い込まれていった。

(いや、いや……！ お願い、助けて……誰か！)

奇跡というものは起こるものではなく起らすものだ、と誰かが言っていた。だがこんな状況下にいる自分に、奇跡が起こせるはずがない。

「頭からいくか？」

「ああ、それがいいな。それじゃ、一気にいこーザ」

ヤカンが自分の真上に持ち上げられたことを肌で感じたカエデは、

反射的に両手を固く閉じた。

(雲八さまー)

せめて、いちどだけでもいい。最後にあなたの笑顔を見たかつた。

全てを諦めて全身から力を抜いたカエデに熱湯の入ったヤカンが傾けられた……まさにその瞬間だった。

インターホンが鳴つたのだ。

「…………あ？」

低い声を上げて誰かが立ち上がる気配。今のは、きっと翼だらう。

「誰だよ、こんな夜中に」

「ハジメじゃねーの？」

「…………さあな。酔っ払いかもしけねーし…………」

男たちが小声で相談している間に、再びインターホンが鳴つた。恐ろしい程静まり返る部屋。誰かが唾を飲む音が聞こえた。

「おい、見てきたほうがいいんじゃね？」

誰かが呟くと同時に、またインターホンが鳴る。そつだな、と翼が小さな声で答えた。

「じゃあ、ちょっと見てくる。中断しつけよ」

「わかつてゐつて」

「酔つ払いだつたら承知しねえからなー」

ヤカンはカエデの太ももの隣へ下ろされたらしい。熱い空気が太ももに伝わり、カエデは小さく体を跳ねさせる。  
しかし、ほんの一瞬だとしても恐怖から救われたのだ。  
嬉しいような気もする。が、折角覚悟を決めていたのにそれを台無しにされて若干悔しいような気分にもなった。

## 第43話 救助

誰かの悲鳴が、カエデの鼓膜を震わせた。ハツとしてカエデは体を固くする。今の声は、……翼のものだ。

「お、おー、翼！ どうした？」

「……う、うわっ！」

自分が殴られていた時の様な鈍い音が聞こえ、他の男たちの悲鳴が次々にあがつた。何かが床に倒れる音が聞こえ、男たちの怒り狂う声がそれに重なる。

男たちは何者かに向かつて酷い暴言を吐き散らしているが、苦しげなその声音から優位にたっているわけではないことは安易に想像できた。目隠しをされているせいでのが起こっているのか全く理解できない。

不安と恐怖で微動だにしないカエデの頭に、何者かの片手が載せられた。

「一」

驚いてぐもつた声をあげ、必死に体を捩るカエデ。その耳に、酷く懐かしい声が届いた。

「カエデ、遅くなつてごめん。場所探しに手間取っちゃつて」

カエデは自分の耳を疑つた。聞き間違いでないのなら、幻でないのなら、この声は。

(雲八さま……?)

はたと動きを止めるカエデの耳元で、雲ハは優しく「う囁く。

「ちょっと待つて、今解くから

その言葉通り、すぐに大きな手が黒い布と猿轡を取り去ってくれた。視界が明るくなると同時に、呼吸が楽になる。目の前には、一番会いたいと願っていた人の姿。幻ではない。本物だ。

「雲ハ様……っあ、ありがとうございます……」

余りの嬉しさで語尾が震え、途端に両目から涙が溢れ出した。折角見ることの出来た彼の顔が、涙でぼやけていく。

「間に合って良かった」

雲ハはただそう言ってカエデに微笑みかけた。一度と見ることはできないのだろうと思つていたその笑顔を見て、カエデは更に目頭が熱くなるのを感じた。

## 第44話 交換条件

「帰る」

優しい声だった。

カエデは泣きながら必死に頷く。言葉が出てこなかつた。  
カエデの手をとつた雲ハは、その足元に目を向け、鎖の存在に気づいた。

「これは鍵が無いと無理っぽいな。……カエデ、鍵は誰が持つてる？」

「……恐らく、翼さま、だと思います」

しゃくりあげながらそう答えると、雲ハは小さく頷いて立ち上がつた。

「雲ハさま」

不安げな声をあげるカエデ。すると彼は振り向いて、先程よりもっと優しく微笑んだ。

「ちょっと待つて。鍵貰つから」

そう言うが早いか、雲ハはすぐそばに倒れていた男を抱えあげた。男はぐつたりしていて、いつも簡単に拘束された。気を失っているらしい。

そして雲ハは、床に散乱している包丁やカッターナイフの中から細いナイフを選んで拾い上げ、抱えている男の喉元に突きつけた。

「翼つて、どの人？」

雲ハは向ひつを向いているが、自分に尋ねたのだろうと理解したカエテはすぐさま口を開いた。

「ええと、……先程、玄関に向かわれた方です」

「ああ、あの人か。そんなに強く殴っては無いから、多分気絶してはいなはずだけど……」

雲ハが言い終わるよりも早く、玄関の方から床を這うようにして、翼がやつて來た。口の端から血を流し、目元が青く腫れ上がっている。

翼は雲ハを睨みつけながら立ち上がった。カエテはその瞳に怯え、思わず目を逸らした。

「よお……お前、何者だ？」

翼はにやりと口元を歪めてそう尋ねた。その後に、壁に向かつて血の混じった唾を吐く。

「もしかしてそいつの新しい雇い主か？」

「……ええ。まあ」

「ほお、そうか。お迎えとはわざわざいつたな」

挑発するような口振りにも、雲ハは何も言わなかつた。ただ黙つて、冷たい目で翼を見据えていた。

「お前、随分強いな。どこの族の奴だ？」

「族には入つてません。普通の学生です。中学と高校で少々空手を

やつてましたけど、それ以外は何も」

カエデは息をするのも忘れて雲八の横顔を見つめていた。よく知っているはずの雲八の顔が、全然知らない人の顔に見える。口調も、声音も、自分の知っているものとはかけ離れている。よそよそしくて、冷たい。同じ人間なのに、ここまで違う素振りが出来るものなのだろうか。

「それはそうと、翼さんですよね？　この鎖外す鍵、渡して貰えますか」

翼は一瞬だけカエデの足元に向けた目線を、すぐに雲八の方に戻した。

「嫌だと言つたら？」

にこりともせずにそう尋ねた翼とは対照的に、雲八は突然満面の笑みを浮かべた。

「この人を殺します」

抱えた男の首にナイフを当てる雲八の目は、本気だった。

## 第45話 交渉成立

言葉を失う翼とカエテ。雲ハは男の首に少しナイフを食い込ませた。

「俺、気が長い方では無いんで、早く渡してください」

翼は乾いた唇を舐めて、ふん、と鼻を鳴らす。

「お前、正気か？ そいつは人間だぞ。人を殺したとなればお前は犯罪者だ」

「……ええ、分かつてますよ」

「俺たちはロボットを壊そうとしただけだ。つまり法には引っかかるねえ。確実にお前の方が不利だろうが！」

「……。ロボットを壊そとしただけ、か」

雲ハが先程よりも少し低い声でそう呟いて、片眉を吊り上げた。手に持つたナイフを、抱えた男の頬に掠める。男の頬が少し切れて血が滲んだ。

「俺はカエテのことを見たんだって思つてない」

雲ハはそう呟いて再び男の喉へ、垂直にナイフを突きつけた。

「本当は俺、今すぐにでも君たち全員を殺してやりたいくらい腹が立つてゐるんだ。でも、鍵を渡せばみんな助けてやるんだよ？ それの何が不満なわけ」

力の差はもう分かつてゐるだろ？ と雲ハは翼を睨みつける。田元

を腫れあがらせたままの翼は、う、と呻いてポケットに手を入れた。

「わ、……わかつたつづーの！……ほら、投げるぜ」

がしゃりという音と共に、鍵が雲八の足元に投げつけられる。雲八はその鍵を拾い上げ、カエデの鎖を外した。

「じゃあ、この人も解放します」

雲八は男の首から手を離して床に転がし、ナイフをその隣に置いた。

「カエデ。行こう」  
「は……はい……」

雲八と手を繋ぎ、カエデはようやく安心して微笑んだ。やっと帰れる、そう考えたらとても幸せな気分だった。

## 第46話 策略

2人で玄関へ向かおうと足を踏み出したその時。気絶していたはずの男が、突如顔をあげた。驚いて一瞬怯んだ雲ハの足元に、熱湯の入ったヤカンが倒される。

「うわ！」  
「あやあー！」

ヤカンが倒れた拍子に、熱湯が床の上に流れ出した。熱湯から逃れようと慌てて後ろへ飛び退いた雲ハは、背中に強い衝撃を感じた。

「雲…………… わあ…………！」

カエテの叫び声が、どこか遠くの方から聞こえたような気がした。脳が揺らぎ、吐き気が込み上がる。その場に膝をついた雲ハに、倒れていた男が飛び掛った。

(しまつた！)

そこでようやく、雲ハは気づいた。

氣絶していると思っていたあの男は、氣絶なんてしていなかつたのだ。すべて自分を捕らえる為の罠……。

(やられた……)

男に馬乗りになられた雲ハは、逃げる」とは不可能だと悟った。

「カエテ！ 来るな、逃げるんだ！」

「で、でも、でも……」

瞳に涙を浮かべておろおろするカエテに、雲八は声を振り絞つて叫ぶ。

「いいから早くー。」

カエテは更に迷った後、意を決して玄関に向かつて駆け出した。

「逃がすか！」

襲い掛かつてきた翼を無我夢中で突き飛ばして、扉を押し開け外へ転がり出る。

「待て、IJの野郎！」

逆上した翼が、怒りを露にした顔で追いかけてきた。カエテは、何を思ったか下に続く階段を下りようとはせず、上へ続く階段を駆け上がった。

「まつー！ やつぱロボットってのは能無しだな。どこに行くつもりだよ、ああ？」

翼は笑いながら更にスピードをあげた。

(IJの先は行き止まりだ。……絶対捕まえられるー。)

数分後、予想通り行き止まりの壁にたどり着いた。カエテはその壁に手をついて振り返ると、強く翼を睨みつけた。

「……馬鹿なやつだな。普通上じやなくて下に逃げんだろ」

つかまえた、と翼の手がカエデの腕を強く掴む。人工的に造られた彼女の手が、みしみしと音を立てた。

翼はそのままカエデの髪の毛を掴むと、すぐさま口を塞いひとつ手を伸ばしてきた。そのタイミングを見計りつて片足で翼を蹴り飛ばし、カエデは声を限りに叫んだ。

「いやああああ！ 誰か、誰か助けてください！」

翼の顔が一瞬にして蒼ざめる。ここはマンションで、しかも時刻は真夜中。そんな時に女性の悲鳴が聞こえたといつ事は、言つまでも無く異常事態だ。

「こいつ……黙れ！」

慌てて翼はカエデの腹部を何度も蹴りつけたが遅かった。叫び声を聞きつけたあちこちの部屋に、電気がついたのだ。

マンション中の住民たちが、扉を開けて何事かと顔を覗かせる。

「どうした？」

田の前の部屋から出てきた男性に、カエデは蒼ざめた顔で叫んだ。

「この人には、乱暴されそうになつたんですね！」

腹部を蹴られたせいで服には泥が付き、部屋に拘束されていた時に殴られたため口の端は切れ、血が出ている。あちこちに怪我をしているカエデの言葉は酷く真実味を帯びていた。

「な、何だつて？ 大丈夫か！」

カエデの言葉を聞いた他の部屋の人間たちも、顔を見合させて何か囁きあつてゐる。翼は突然のアクシデントに、カエデの髪の毛を掴んだまま固まつていた。

「あ！ あんた、9階の人じゃないか？ 僕、何回か見たことあるぞ！」

誰かが翼を指差してそう言つた。それを聞き、あちこちからやわめきが起こつた。

「ち、違えよ！ 「イツはロボットだから……その、」

翼は慌ててカエデの髪の毛から手を放し、弁解しようとした口を開いた。しかし、友達とロボットを破壊して遊ぼうと思つていました、などと言えるはずも無く、言葉に詰まる。

部屋から出てきた住民たちに囲まれて、翼の姿はあつといつ間に見えなくなつてしまつた。カエデはその騒ぎと人波に紛れて後ずさりをし、誰もこちらを見ていないことを確認して、その場から逃げ出した。

## 第47話 怪我

階段を下りたカエデは、驚いた。翼の部屋がある階にまでカエデの悲鳴は届いていたらしく、通路が沢山の人で埋め尽くされていたのだ。

その中に、翼の友人の姿も見える。……雲ハの姿は、どこにもない。まだ室内に拘束されているのだろうか。

カエデは唇を引き結び、ゆっくりと人の波の中へ紛れ込んでいった。なるべく背の高い人の後ろを選び、隠れながら翼の部屋の前へ辿り着く。翼の友人たちは人波を搔き分けながら上の階への階段を駆け上がっていた。きっと今、室内はもぬけの殻だろう。

部屋の扉を開けて、侵入して鍵を掛ける。室内に足を踏み入れたカエデは、思わず顔を顰めた。……鉄臭い臭いがする。血の臭いだつた。

一体どうしてこんなに血の臭いがするのだろう。嫌な予感がした。

「雲ハさま……？」

「……」

恐る恐る、暗い室内に向かつて声を絞り出す。返答は無い。

カエデは壁を弄つて、電気のスイッチを入れた。室内が一瞬にして明るくなる。

すぐ目の前に、両腕を後ろ手に縛られている雲ハが倒れ込んでいた。

(良かつた……)

安堵して思わず泣きそうになりながら、ぐっと涙腺を閉めて雲八に駆け寄る。

「雲八さま」

雲八は返事をしない。

「雲八さま……？」

カエデはしつつ伏せに倒れている雲八の体を、そっと仰向けてした。

「…」

その瞬間、カエデは両手を見開き、両手で口を覆った。

「雲八さま！……雲八さま！」

雲八の頬は、どうやら殴られたらしく赤く腫れあがっていたのだ。口の端と鼻、薄く開いた唇の間から血が出ている。更に、雲八を搖り起こそうとその肩に触れたカエデの手に、何かどろりとしたものが付着した。

「いやあああ！」

雲八の肩には、何か鋭利な刃物で傷をつけられたような傷ができる。相当深く切られたのだろう、そこから止め処なく血が溢れ出している。

カエデは数秒間、そのままの状態で固まっていた。  
両手で顔を覆い、泣きながら雲八の姿を見つめる。

(は、はやく、手当てしないこと……)

体が震えた。翼に拘束されていたときよりも強い恐怖心が、カエデを支配する。早く手当てしないと、もしかしたら雲八が死んでしまうかも知れない。

死ぬということは、一度と笑わなくなるということだ。喋らなくなるこということだ。この世からいなくなるということだ。この世からいなくなるということは、一度と会えなくなるということだ。

カエデは泣きながら、細い腕で懸命に雲八を抱き上げた。気絶して力を失っている雲八の体はまるで鉛のように重かつたが、カエデは必死に足を踏ん張つて、一步一歩玄関へ向かって歩き出した。

早く、雲八さまを助けなければ。

ただひたすらその想いがカエデの体を突き動かす。カエデは雲八を引きずるようにしながら部屋を出た。

先程の騒ぎは更に広まっているらしく、この階の住人はみんな上の階へ移動してしまっていて酷く静かだった。お陰で楽に雲八を運び出すことに成功したものの、独りだといふことが物凄く不安で仕方なかつた。

ひとつそりと静まり返る暗闇に吸い込まれるように、少しづつ足を踏み出しながらマンションを離れる。

心細さで瞳から涙が零れた。涙は頬を伝つて地面へ流れ落ちていった。

ずるずる、ずるずる。夜の道路に、カエデが雲ハを引きすりながら歩く音だけが聞こえる。とは言つても、今その音を聞いているのはカエデだけで、人影は全く無い。

(これからどうすればいいんだろう)

病院にいくべきだらうか、ヒカエデは足を止めた。しかし病院がどこにあるのか、カエデは知らないのだ。

(こんな真夜中だけ、ピヨウインはまだ開いているのかしら？  
それともスーパーやコンビニのよう、夜になつたら閉まってしまうのかしら？)

もしかしたら、救急車と呼ばれるあの車を呼ばなければ病院に入れてもらえないのかも知れない。いつも見ているテレビドラマでは、大体の患者があの白い車に乗せられて病院へ搬送される。

(救急車を呼ぶにはどうしたらいいの？……そうだ、きっと電話がいるわ。電話をかけねばいいんだ)

電話はどこにあるのだろう。いや、仮に電話が見つかってしても、どこへ電話をかければ救急車を呼ぶことができる？

カエデは唇を噛んだ。泣ぐのを我慢しようと力んでみるが、涙は結構無しに頬を流れしていく。

どれくらい泣き続けただろう。

ふと、前方から足音が聞こえた気がした。その足音はゆっくりとこちらへ近づいてくる。

カエデはのろのろと顔をあげ、音のしたほうに視線を向けた。

「……？ おい、アンタ……」

戸惑ったようなその声に、カエデは首を傾げた。聞いたことのあるような声だった。

暗くて、相手の顔が見えない。必死に目を凝らし、数秒後

… カエデは、驚きのあまり両目を大きく見開いた。

「東山博士？」

その人は、カエデを造った大野博士の元弟子である東山博士だった。

「どうして、こんなところに……？」

気の抜けたようなカエデの問いに、東山は慌てて答える。

「俺の研究所がすぐ近くにあるんだ。……いや、それより。それ、何背負つてんだ？」

カエデの背中を指差す指が微かに震えていた。聞かずとも、分かつているのだろう。

「……私の雇い主である、青空雲ハさまです」

「雇い主……？ お前さんを虐待してた奴か？」

「違います。私が危害を加えられていたのは、以前の雇い主様です。この方はとても優しくて勇敢な方です。……私を、助けに来てくれ

た……」「

全て言い終わるより先に、涙が頬を濡らしていた。再び泣き出したカエテに驚いたのか、東山はばつが悪そうに頭を伏せた。

「その、なんだ……今の話じゃよく分からんから、詳しく聞かせてくれ。俺の研究所はすぐそこだ」

「はい……でも、」

「でも?」

「キュウキュウシャを呼ばないといけないんです」

「……なんで?」

「雲八さま、大怪我をされているんです」

「……。何だつて……?」

東山は怪訝な顔をして雲八の顔を覗きこんだ。痛々しく腫れ上がったその顔とカエテの衣服についている血痕を見て、全てを悟つたようすに顔を顰める。

「……分かった、手当をしてやる。ついて来い」

## 第49話 会話

「……」

目を覚ますと、見知らぬ部屋に寝かされていた。雲ハは天井を見つめながらぼんやりと記憶を辿る。

（そうだ、俺……カエテを助けに行って、逆に捕まつて……。捕まつた、ってことは、ここはあの男の部屋か？ う、体中が痛い）

体の痛みに顔を顰めたその瞬間、脳裏にカエテの笑顔が浮かんだ。そうだ、カエテはどうなったのだな？

「カエテ！」

布団から跳ね起きた瞬間、肩と顔に痛みが走った。思わず呻き声を上げて再び仰向けに布団へ沈み込む。唇を噛んでみたが、痛みは引かない。少しだけ顔を動かして肩に視線を向けると、そこには白い包帯が巻いてあり、少し血が滲んでいた。

もしここがあの男の部屋なら、こんな風に手当てすることなどありえないだろう。何故ならばあの男は、間違いなく自分も殺すつもりだつただろうから。

（つてことは、ここはあの男の部屋じゃないのか？ ……それなら、ここはどこなんだ）

不安で無意識のうちに呼吸を止めてしまっていたらしく、息苦しさ

を感じて大きく息を吐き出す。

するとその瞬間肩にじわりと血が滲んだ感覚を感じ、雲ハは再び息を止めた。呼吸をする度に血液が肩から滲み出でてくる感じがして、酷く気持ち悪い。結構な痛みもあるが、どちらかと言えばその気持ち悪さの方が嫌だった。

痛みに顔を歪めて田を開いていた部屋の右側にあつた扉が開いた。ハツとして田を開いた雲ハの田の前に現れたのは、見覚えの無い男性。

「あ……」

驚きのあまり思わず声を漏らすと、男性は雲ハの顔を一瞥してからひとつ瞬きをした。

「……田が覚めたか。調子はどうだ？」

「え、あ、あの……」

色々な疑問がぐるぐると頭を巡る。でも、何故か言葉に出すことはできなかつた。その代わりにまた肩から血が溢れてくる嫌な感覚をして、反射的に顔を歪めてしまう。

「肩、痛むのか」

「……はい、少しだけ」

「そつか。じゃあ包帯巻き直しとか？ 自分で巻けるよな」

言いながら男性はテーブルの上に置いてあつた包帯を手渡してきた。今まで気が付かなかつたが、銀色のテーブルの上には何やら医療器具のようなものが散乱している。

「……あなたが助けてくださったんですか？　ありがとうございます」  
「すみません、ご迷惑おかけして」  
「あー、んなこといいよ別に。それより、俺は人間の医者じゃない  
から、後で病院にでも行ってちゃんと手当してもらえよ」  
「え。人間の医者じゃないって……。もしかして、獣医さんですか  
？」

テープルにのつてているのはどう見ても医療器具だと思つたが……。  
雲八は銀色のテーブルを見つめた後に、もう一度男性の方に顔を向  
けた。

「いや、獣医じゃない。俺の専門は機械だ」  
「機械……？」  
「ああ。ロボットやANDROIDの修理を仕事にしているんだ」  
「ANDROID……。あつー！」

思い出した、と雲八は顔を蒼ざめる。カエデはどこかのదらう。  
まさか、まだ捕らわれたまま？

「あの！　カエデは　カエデを知りませんか？」  
「カエデ？」  
「16歳くらいの女の子なんですけど……」  
「……ああ、もしかして004号の事か？　軽く脳の線が切れて液  
漏れしてゐみたいだつたから、修理中だ。恐らくそろそろ目が覚め  
る頃だらう」  
「どの部屋にいるんですか？」  
「そここの扉のすぐ向こうだ」

男性はそう答えて咥えた煙草に火をつけた。煙草の煙を吐き出しな  
がら、立ち上がりうとした雲八に目を向ける。

「ロボットならまだしも、人間の治療は専門外だから出血多量で危険な状態になつても助けられない。……俺の言つてることが理解できたのなら無闇に起き上がるな。004号には目が覚めたらこの部屋に来るよう伝えある」

その淡々とした口調に、雲ハはハツとして頷いた。

「……は、はい。すみません……」

大人しく再びベッドに横になつたのと、目の前の扉が開いたのはほぼ同時だつた。

「雲ハさま！」

「……カエデ！」

首や頬に沢山の管を通したままのカエデが、泣きそうな顔をして立っていた。カエデはそのままこちらに向かつて駆けて来た。体を起こした雲ハの首に手を回し、強く抱き締める。

「カ、カエデ……」

「良かつた……じ無事で……。……私のせいで、雲ハさまが……、ごめんなさい、……本当にごめんなさい……」

「だ、大丈夫。大丈夫だから落ち着いて、カエデ」

少し顔を赤らめながら、雲ハは慌てたようにカエデの頭を撫でた。こほん、と咳払いをひとつして、東山がカエデたちの側へ数歩近寄る。

「……お取り込み中のところ悪い、004号。」ちらに来る時には

管を外せと言つておいたと思うんだが

「え……、あつ！ 申し訳御座いません。うつかりしていました……今すぐ外して参ります」

雲ハから手を離し、カエテはいそいそと扉の向こうへ消えて行つた。

「さて」

東山はちらりと雲ハに目を向けた。

「大丈夫か？ まだ顔が赤いようだが」

「…」

雲ハは片手でぱたぱたと顔を扇ぎながら、大丈夫ですと呟いて視線を泳がせる。

「…」  
「慣れてないもので……」

「そうか」

愉快そうに東山が口元を歪めるのを見て、雲ハは首をぶるぶると横に振つた。

「へ、平氣です。なんていうか、びっくりしただけというか、その……とにかく平氣ですか！」

「わかつてるよ。別に何も言つてないだろ」

「それじゃあそのニヤニヤ笑いをやめてください…」

「笑い顔なのは元からだ」

「さつきまでそんな笑み浮かべてなかつたでしょ！」

## 第50話 罪人

数分後、カエデが戻ってきた。

「異常は無いか？ 004号」

東山の問いかけを受けて、カエデは小さく頷く。

「はい。異常ありません」

「そうか」

「ありがとうございます、東山博士」

「ああ」

東山はそう言つて頷くと、雲八に顔を向けた。急に緊張してしまつた雲八は、思わず背筋をぴんと伸ばした。

「青空雲八くん、だつたかな。大体の事情は004号から聞いた。大変だつたな」

「は、はい……」

「俺の名は東山。お前さんが004号を購入した店の店主、大野博士の元弟子だ」

「元ですか？」

「ああ。俺は自分に才能が無いことを悟つて、大野博士の研究所を無断で飛び出したんだ。それからこの研究所を立ち上げ、ロボット修理の仕事をしている」

中途半端な知識だけを持つて、な。と言つた東山の声は小さく、消え入りそうだった。きっとこの人は今まで辛い思いを沢山してきたのだろう。それを悟つた雲八はもう、それ以上東山のことについて

は聞かなかつた。

「……そうだ、そういうえばついさつきラジオで流れてきたんだがな、お前たちを監禁していた翼とかいう男、指名手配犯になつたらしいぞ」

「えつ」

雲ハとカエデは同時に叫び、顔を見合せた。

「奴の仲間の1人がマンションの住人に質問攻めにされて、全てを洗いざらい喋つちまつたらしい。それを知つた翼と他の仲間たちはいつの間にか姿を消していく、警察が行方を追つているんだとさ。調べによれば奴等、お前たち以外の人殺しにも関わつてゐるらしいじゃねえか。そつちの件は立派な犯罪だからな。おまけに今回の傷害事件もあるし、捕まれば有罪は間違ひない」

これで二度と、お前さんたちの前には姿を現せないだらうなと言つて東山は煙草に火をつけた。

「……翼さまたちが殺害した方は、朱音をまといの方です。翼さまとは元、恋人同士で……」

カエデはいつの間にか両手をかたく握り締め、床に目を落として眉を顰めていた。以前自分の前に姿を現した朱音は、それはもう性格の悪そうな顔をしていた。

自分の黒い瞳が無くなつてしまつたのは彼女のせいと言つても過言ではない。カエデは彼女のこと恨んでいたのだ。

しかし翼の部屋で朱音の遺体の写真、そして殺害される瞬間までを映したビデオを見てしまつてから、そんな気持ちは消え失せていた。泣きそうな顔をして、生き続けたいと翼に懇願していた朱音の顔が

脳裏に浮かび、いくら消そうとしても消えてくれない。

彼女も同じ気持ちだったのだろうか。殺される瞬間の自分と同じようにな、この世界に絶望して死んでいったのだろうか。

他人の気持ちは分からぬが、もし彼女が自分と全く同じ気持ちを抱きながら死んでいったのだとしたら、ただ無念でならない。自分は機械なので、何とか再び命を貰つて雲ハと出会い、今まで知らなかつた世界の美しさや素晴らしさに気づくことができた。

朱音は世界の本当の美しさを知つていただろうか。最後に恋をした男性というのは、一体どんな人だったのだろう。

瞳の端に涙が滲むのを感じて、カエデは慌てて床に視線を落とした。そうでもしないと、今にも大声を上げて泣き叫んでしまいそうだつたから。

「カエデ」

すぐ耳元で、優しい声がした。カエデははつとして雲ハの方に目を向ける。

「帰ろうか、カエデ」

「……え」

雲ハが顔を顰めながら立ち上がった。それを見た東山は慌てて片手でそれを制す。

「何してるんだ、暫く安静にしろと言つただろう。出血多量で死なれたら困ると何度も言わせるな」

「平氣です、すぐ病院に向かいますから。助けて頂いて本当にありがとうございました」

「どういざいました」

軽く肩を押さえるようにして歩き出す雲八。それを横から支える力エデ。

暫くそんな2人を見つめた後、東山はやれやれと首を横に振つて微笑んだ。

「……仕方が無いな。こここの電話番号は004号に伝えてあるから、何かあつたら連絡してくれ」

「はい。失礼します」

「ありがとうございました」

2人が去った後、東山はベッドや医療器具を片付けながら小さく息を吐いた。

「まつたぐ……」

あんな顔をするロボットは、生まれて初めて見た。  
きっとあの男なら〇〇4号を幸せにするだろつ。

あんなに沈んでいた彼女の表情を、あそこまで輝かせることが出来たのだから。

明け方、雲ハとカエデは自宅のマンションへ帰りついた。

色々なことがあつたせいでへとへとだったので、結局病院へは行かなかつた。

「疲れた……今はもう、寝よ……」

雲ハはもごもごとそう咳いて、玄関先へ倒れ込んだ。

風呂に入つていないので汚いまだが、次目覚めた時に入れば問題ないだろ？。

「雲ハさま、風邪を引いてしまいますよ

心配するようなカエデの声。

その言葉に答える気力も、もう残つていなかつた。

雲ハの意識は吸い込まれるように、深い眠りへ落ちていつた

……

カエデが目を覚ました時、もう時刻は昼前だつた。

慌てて起き上がつて玄関へと向かつたところ、そこにはまだ雲ハの姿があつた。

幸せそうに眠つている雲ハを見て、カエデはそつと微笑みを浮かべる。

風邪を引かないようにと夜かけておいた毛布の位置も雲ハの体も全く移動していないということは、相当ぐつすり眠り込んでしまつているということなのだろう。

雲ハを起こすのはやめ、こんな状態の時に人が来れば恥をかいてし

まうだらうから、玄関の鍵も閉めたままにしておく。

「……雲ハセサム……」

その寝顔を見つめ、また泣きやつくなる。

（助けに来てくださって本当にありがとうございます。私が今ここに居られるのも、全て雲ハセマのおかげです）

心中でそう呟いて、カエデは再び血室へと戻った。  
あの様子なら恐らく食事を作る必要は無いだろう。

部屋の掃除でもしようかと立ち上がった時、ふと、テーブルの下に積み上げてあるものに気が付いた。

屈み込んで拾い上げてみて、はっとする。

それは、ついこの間モカから貰った漫画だった。そういうえば全く読

んでいない。

カエデはその場に座つて、その漫画を手に取つた。

あの日のモカの笑顔と言葉が脳裏に蘇る。

『なんかねえ、泣ける恋愛モノらしいから、読んでみなよー。』

「……れんあいもの……」

恋愛、といふ言葉は知つてゐる。

男女が恋い慕うこと、また、その感情の名称だ。

好き＝恋、片想いと呼ばれるもの。恋愛とは、男性と女性がお互いを想いあうことを意味する。

恋愛モノというのは恐らく、男女の恋模様を描いた作品という意味なのだろう。

誰かの恋愛事情を読んで涙を流す、といふ行為がまだ良く理解出来

なかつたが、とつあえずカエテは漫画のページをめくつた。

## 第52話 来客

インター ホンの音が聞こえた気がした。顔を上げて、玄関の方へ顔を向けてみる。

……聞き間違いではないらしい。またインター ホンが鳴った。いつの間にか漫画に夢中になってしまっていたようで、時計の針は先程から2時間半も進んでいた。

慌てて漫画を床に伏せて立ち上がり、玄関へ向かう。

雲ハはまだ同じ場所で心地よさそうに寝息を立てて眠っていた。

「ど、どなたでしょうか」

扉の外に向かつてそう尋ねてみると、

すると、扉の向こうからは元気の良い女性の声が聞こえた。

「あっ、カエデちゃん？」

「！モカさん、ですか？」

「うん、そうそう！良かつたあ、留守かと思つちやつた！あのねー、友達から雲ハが休んでるって聞いてね、ちょっと心配になつたから食事でも作ろうかと思つてお鍋の材料持つて来たの。良かつたら入れてくれない？」

「は、はい。少々お待ち下さい」

カエデは慌てて玄関の鍵を開けた。

すぐさま扉が開き、モカが威勢よく飛び込んでくる。

「やつほー雲ハ！ 元氣ー？」

はた、とモ力は動きを止めた。

たたきに倒れている雲ハを見て、突然笑い声をあげる。

「え、もしかして雲ハつてば一日酔い？ 大丈夫ー？」

「モ、モ力さん。あの、出来ればあまり大声を出さないようにお願いします。雲ハさまは……」

カエデが言い終わるよりも先に、雲ハの体が動いた。

モ力の甲高い声で目が覚めてしまつたらしい。雲ハはゆっくりと上半身を起こし、首を傾げた。

「……モ力？」

「あ、雲ハ。おはよー！ 今日大学休んだでしょ？ お鍋の材料持ってきてあげたよ。皆で食べよー！」

「え、……俺、ずっと寝てた？」

雲ハと目が合い、カエデは小さく首を縦に振った。

その仕草を確認した後、雲ハは再びその場に寝転んで呻き声を上げる。

「そつか……。モ力、悪いけど、俺いらない……食欲無いし……もうちょい寝かせて」

辛そうに顔を歪めながらそう呟く雲ハを見て、カエデは眉を下げた。まだ傷が痛むらしい。病院に行かなくて本当に大丈夫なのだろうか。

「……雲ハつてばやつぱ一日酔い？ 顔色悪いし。じゃあ、ゆっくり休んでなよ！ とにかく折角来たんだから食事作つたげるね。力エデちゃん、一緒に食べよー」

モカは言いながら遠慮なく室内へ入ってきた。

軽い足取りで台所へ向かい、そつそつ。と思い出したように振り向いて、こう言った。

「カエデちゃん、そのままだと風邪引いちやうから雲ハを部屋に連れていってあげてくれる？ あたし、準備しとくからさ！」

「えつ……、は、はい！ 了解しました」

カエデはモカの言つとおりに雲ハの体を支え、助け起こした。起き上がった瞬間雲ハが僅かに呻いたのを聞いて、心配そうに顔を歪める。

「雲ハさま……、大丈夫ですか？」

雲ハはカエデのその心配そうな瞳を見て慌てて頷き、笑みを浮かべた。

「あ、うん。……平気だよ、全然。ちょっと疲れただけ。傷も今はそんなに痛まないし、もう少し寝れば体調は回復すると思うから」

「……そう、ですか」

カエデは少し安心して、ほっと息を吐いた。

「ありがとう、カエデ。一人でも部屋には行けるから、モカが変なことしないように見張つておいて？」

雲ハは冗談っぽくそう言つて笑うと、カエデの手を離れて自室の扉の向こうへと消えて行つた。

その後カエデは暫くの間、雲ハの部屋の扉をじっと見つめていた。

雲ハが自分の手から離れて部屋へ入つていつた時、何となく孤独を

感じたような気がしたのだ。

雲八にもっと触れていたい、と、そう思った。

(どうしてだらり、私……)

いつの間にか、あの笑顔がすぐ近くに無いと安心出来なくなってしまっている。

「あつ、カエデちゃん。お鍋勝手に借りつけたけど良かった？」

台所へ向かうと、既にモ力は料理に取り掛かっていた。

「はい、構いません」

「そつか、良かつたあ。……さて、今日はちょっと頑張っちゃおうかな！」

モ力は腕まくりをして、野菜を包丁で切り始めた。

カエデはぽんやりとそんなモ力の後姿を見つめて、ふと、思つた。

モ力は人間で、自分はロボットだ。

私たちとは同じ様に呼吸をし、料理を作り、会話をする事が可能である。

しかし、私たちの間には計り知れない大きな差がある。それは目に見えないけれど、確実に存在する。

モ力は人間だ。雲八も人間だ。だが、自分は違う。

言つてしまえば、ただの金属の塊なのだ。心が無ければ、そこらじゅうを駆け回つている車や、毎日自分が使用している洗濯機などと同じ様なものなのだ。

(どうして私には心があるのだろう)

車も洗濯機もテレビも電子レンジも自分と同じ“仲間”だ。彼らには心がないが、自分にはそれが存在する。

(……といふことは、私は車や洗濯機の仲間では無い？)

幾ら考えても答えは出でこない。

自分には心があるから身の回りにある機械とは違う存在だろつ。けれども人間の体は鉄に覆われてなどいない。心臓も脳も全て、電子的な命令で作動してなどいない。つまり自分は人間の仲間でも無いのだ。

(私は、何と同じモノなんだろつ)

自分が雲八の仲間では無いという事実。

モカと雲八のやり取りを見ていたら、突然心の中に浮かんできた疎外感。

急に、どうつかずな自分の存在に恐怖を感じた。

「カエデちゃん、この味付けどうかな？ ひょっとしたら濃い過ぎるかもー」

モカが笑顔で器に入つた鍋の汁を差し出してきた。

カエデもそれを笑顔で受け取り、口に運ぼうとする。

しかし、突然モカと雲八の会話や笑顔が脳裏に浮かび上がってきて、体が石のように固まつた。

がしゃん、という大きな音と共に食器が床に叩きつけられた。食器は割れはしなかつたが、中に入つていた液体は床に勢い良く飛びはね、広がつていく。

「も、申し訳ありません」

慌ててその場に屈み込み、食器を拾い上げた。

「『』めんカエテちゃん、もしかして熱かった？」

モ力は焦つたような声をあげながら、その隣に座り込んで床に広がった液体を布巾で拭き始める。

「い、いえ……」

そう返事を返すのがやっとだった。

胸が苦しい。思つようにも息が出来ない。

「……カエテちゃん？　どうしたの？　なんか顔色悪いよ」

「……へ、平氣です」

「でも……」

心配そうに顔を覗き込んでくるモ力。

カエテはゆつくりと顔をあげ、モ力の瞳を見つめた。

そして、一瞬躊躇つた後、口を開いた。

「モ力さんはまだ、雪ハさまに好意を寄せているのですか？」

「え？」

「……まだ、彼の事を想つているのですか？」

消え入りそうな声でそつ笑いた後、カエテははつとして首を横に振つた。

「あつ……『』めんなさい！　違います、わ、忘れてください！」

モ力は首を傾げたが、すぐに笑つてそれを否定した。

「あははー！ まつさかあ。今は好きじゃないよ。今はね、遠距離恋愛中の彼氏がいるの。だから雲ハのことは何とも思ってない」

その言葉を聞いた瞬間、カエデの心の中に押し寄せる安堵感と、すぐつたいような不思議な気持ちが湧き上がってきた。

その気持ちを押さえ込もうと躍起になりながら、カエデはモ力にすがりつく。

「モ力さん……、私は故障してしまったのでしょうか？ 変なんです……。今まで感じたことの無いような気持ちが……ずっと続いてる……。胸が痛くて、苦しくて……、まるで、……そう……」

誰かに、恋をしているかのようだ。

「モ力さんに頂いた本の女の子が言っていた症状と酷似しています。どうして……こんなに苦しいのか、辛いのか……わからない……どうしてでしょうか……？」

「あ、……ええ？ も、ごめん、ちょっと良く意味が理解できないんだけど……もしかして、カエデちゃん、誰かに恋してるの？」

モ力の瞳がきらきらと輝く。この年代の女性にとっては大抵、そういった話に敏感だ。

しかしカエデの瞳は対照的に、どんどん暗くなつていぐ。その瞳から一筋の涙が零れた。

「恋……？ これが、恋なのですか……？ そんな……、私……、一体どうしたら……！」

「何？ 何？ 泣くほど好きな人なの？ もし良かつたら教えて！ 話聞くから！」

カエデは首を横に振つたが、モカは全く諦めようとしない。

「あたしの知つてる人？」

「…………」

カエデが小さく頷くのを見て、モカはきやーっと嬉しそうな悲鳴をあげる。

「それってさ、もしかして……って、もしかしなくても…！」

モカはカエデの耳元に唇を寄せ、小さな声で囁いた。

「雲ハだよね？」

その瞬間、血液の温度が急上昇したような気がした。

「…………」

「合ひてる？ 合ひてるよね？」

「…………は、…………い」

「あーっ！ やつぱり？ やつぱり？ 確かに雲ハって結構イケメンだし性格超いいもんねーー！」

モカは嬉しそうにカエデの手を握り、微笑んだ。

「頑張つて！ あたし応援するよ！」

「…………ありがとうございます…………でも、やつぱり駄目です…………。雲ハさまにそんな感情を抱いては…………」

「どうして？ 確かに結構年離れてるけど、全然余裕だと思つよ…世間には10歳以上年の離れてるカップルだつているんだし…」

「いえ……そうではなくて……」

「え？ あ、もしかして親戚間だから馴染つて」と、むづー。そんな常識に囚われちゃうや……

「違うんです」

カエデの皿のふちに溜まつた涙が少しづつ床に落ちていく。それを目で追しながら、カエデは嗚咽を洶らした。

そして カエデは、脳内に浮かんだ言葉を、そのまま口に出してしまつたのだ。

「私は……ロボットだから……」

その瞬間、モカが両手を見開いた。

カエデははつとしモカの方を見る。しかし、もう遅い。

「え？ ちよ、ちょっと、待って……。びつこひ、こと？」

「あ……」

「ロボットって カエデちゃん、が？」

「……っ」

カエデは固く皿を握り、 意を決して、頷いた。

「は、はい……。私は、雲八さまに雇われた……女性型アンドロイドのメイドロボ、製造番号〇〇4号です」

その瞬間、モカはカエデの手を離した。

信じられないものを見ていくよつた顔をして、ゆっくりと後ろへ後ずさる。

「嘘、…………確かに最近、ロボット買つの流行つてるらしくナビ……

まさか……カエデちゃん、も……？

「モ力さん？」

「何で言つてくれなかつたの？……あたし……カエデちゃんのこと好きなのに……。ほんと……妹みたいな……そんな気がしてたのに……。それなのに……。」

モ力の瞳に涙が浮かぶのを見て、カエデは思わずモ力の名前を叫びそうになつた。

しかしそれよりも一瞬早く、モ力が素早く立ち上がり、持つて来ていたバッグを掴んで玄関へ走り出した。

「モ力さん……っ」

「来ないで！」

泣きながら玄関から飛び出していくモ力。

カエデは裸足でその後を追い、モ力の腕を掴んだ。

「（めんなさい）騙すつもりは無かつたんです。ただ……

「……離して！ 離してよー！」

モ力は強く腕を振り払つと、手の甲で涙を拭い、俯いた。

「あたしは、モ力ちゃんに信用されたかつた。モ力ちゃんの抱えてる秘密とか全部、ちゃんと教えて欲しかつた……」

その言葉を最後に、モ力は一度も後ろを振り返ることなく去つてしまつた。

カエデの瞳からは涙が止め処なく溢れて地面に落ちていつたが、まるで足が地面に縫い止められているかのようだ、もうモ力を追いか

けることは出来なかつた。

## 第54話 衝撃

それから数日後、大分傷も塞がり体調も万全になつた雲ハは大学へ向かつてゐた。

歩いていると、ふと前方にモカの後姿を見つけ、早足でモカに近づいていく。

「モカ」

声をかけると、モカは弾かれたように後ろを振り返った。そして、一瞬だけ泣きそうな、辛そうな顔をして唇を噛み締め、すぐに前を向いてしまつた。

「あのさ、こないだカエデから聞いたんだけど、」

「ごめん。悪いけどあたし田中教授に呼ばれてるんだ。急いでるからその話はまた今度ね」

「嘘つかなよ」

「失礼ね、ほんとに呼ばれてるの！　とにかくその話はまた今度にして！」

「……ちょっと、待てって！」

モカの腕を無理矢理掴みこちらを向かせると、モカは眉間にしわを寄せて雲ハを睨みつけた。

「お前、嘘吐く時絶対唇舐めるからすぐ分かるよ」

「…………うるさいっ」

「頼むから話聞いて。こないだカエデから聞いたんだけどさ、知つたんだつて？　カエデが……その、アンドロイドだつて……」

「知つたけど？ それが何よ。あんたもカエデちゃんも、あたしを信用できないから黙つてたんでしょ？ 親戚の子だなんて嘘ついたらやつてわ……。あたしがどんだけショック受けたか、あんたにわかる？」

モ力の瞳に涙が浮かんでいくのを見て、雲八はモ力の両肩を掴み、ゆつくりとこう言った。

「聞いてくれ。カエデは人間恐怖症でさ、最初は人間を見るだけで発狂するくらいだったんだ。だからあの頃は、モ力にカエデがアンドロイドだってことを伏せておくしかなかつた」

それを聞いたモ力は、今日初めて雲八としつかり目を合わせた。

「人間恐怖症……？ なにそれ、どういうこと？」  
「カエデが、もうモ力には隠し事をしたくないって言つから……全  
部話すよ」  
「……？」

カエデと出会つた日、酷くカエデに拒絶された事。少しづつ心を開いてくれたカエデと共に買い物へ行つた時の事。

モ力と出会うまでカエデは雲八以外の人間をまだ信じられずにいた事。

以前の雇い主である翼に受けた暴力の数々、カエデが心に負つた深い傷、再び翼に監禁されまた殺されかけた事……。

長い長い時間をかけて、雲八はカエデと出会つてからこれまでにあつた事の全てをモ力に話した。

モ力は、ただ黙つて雲八の話を聞いていた。その瞳に大粒の涙を浮かべながら……。

「……雲八」

「ん？」

「あたし……カエテちゃんに酷い事言つたの。カエテちゃん、辛い事沢山あつたんだよね。それなのにあたしろくに話も聞かずに、自分の感情を全部カエテちゃんに押し付けやつた……」

モ力は溢れてくる涙を拭いながら、声を絞り出した。

「どうしよう……あんな事言つておいて、今更……謝つたくらいじや駄目だよね。許してもらえるわけないよね。ねえ、雲八、……あたしどうしたらいいのかな……」

「……」

雲八はモ力の頭を撫でてから、言つた。

「今日にでも、カエテに会いに行つてあげてくれないか」

「……！ で、でも……あたしなんか会いに行く資格無いよ……」

「カエテはモ力を必要としてるんだ。カエテにとつて、モ力は大切な友達なんだから」

「！」

モ力はその言葉を聞いた瞬間、雲八にしがみついて泣いた。モ力の背中を撫でてやりながら、静かな声でこう尋ねる。

「会いに行つてあげてくれるか？」

モ力は何も答えなかつたが、雲八の腕にしがみついたまま、何度も深く頷いた。

## 第55話 友達

その夕方、カエデは雲八の声を聞いて玄関へ向かつた。

「雲八さま、おかれりなさい」

「ただいま、カエデ」

雲八が玄関内に入る。それと同時に、雲八の後ろからモカが顔を出した。

モカの顔を見た瞬間、カエデは驚きで両手を見開いて口元に手を当て、気まずそうに地面とカエデの顔を交互に見た。

「モカさん……あの……私……」

すると、モカはカエデに抱きついて涙混じりの声で言葉を紡いだ。

「……カエデちゃん……」「めんね、話は全部雲八から聞いたよ。あたし馬鹿だよね、カエデちゃんの気持ち、全然考えて無かつた」「……」

涙を堪え切れず、カエデは必死でそれを拭いながら笑った。

「そんな……謝るのは私です。モカさんは大切な友達なのに、隠し事をする方がどうかしていました。本当にごめんなさい、モカさん。今度から、絶対に隠し事なんてしません!」

「……カエデちゃん……！」

泣き笑いながら抱き合つ2人を見て、雲八もつられて笑顔になる。

2人の頭を撫でた後、部屋を指差した。

「こんなとこひで話すのもあれだし、中でもうへつ話しなよ。俺、部屋にいるからセ」

話題に「Noカラフル」

「あ、ありがとう雲ハ。それじやあカエテちやん、行こ行こ！」

モ力はもういつもの調子に戻っていた。若干赤い瞳をぱちぱちさせながら、遠慮なく室内へ上がりこんで行く。

「良かつたね、カエデ」

その後姿を見つめながらカエデに向かって笑みを浮かべると、カエデは小さく微笑んで頷いた。

「はい」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7091e/>

---

メイドロボ

2010年10月11日13時38分発行